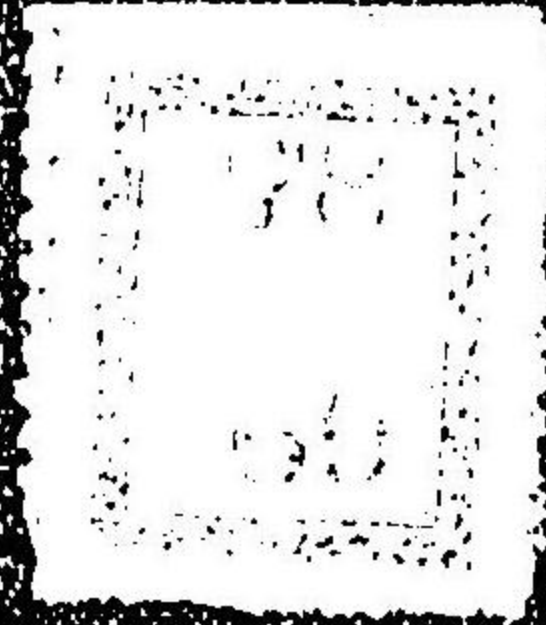


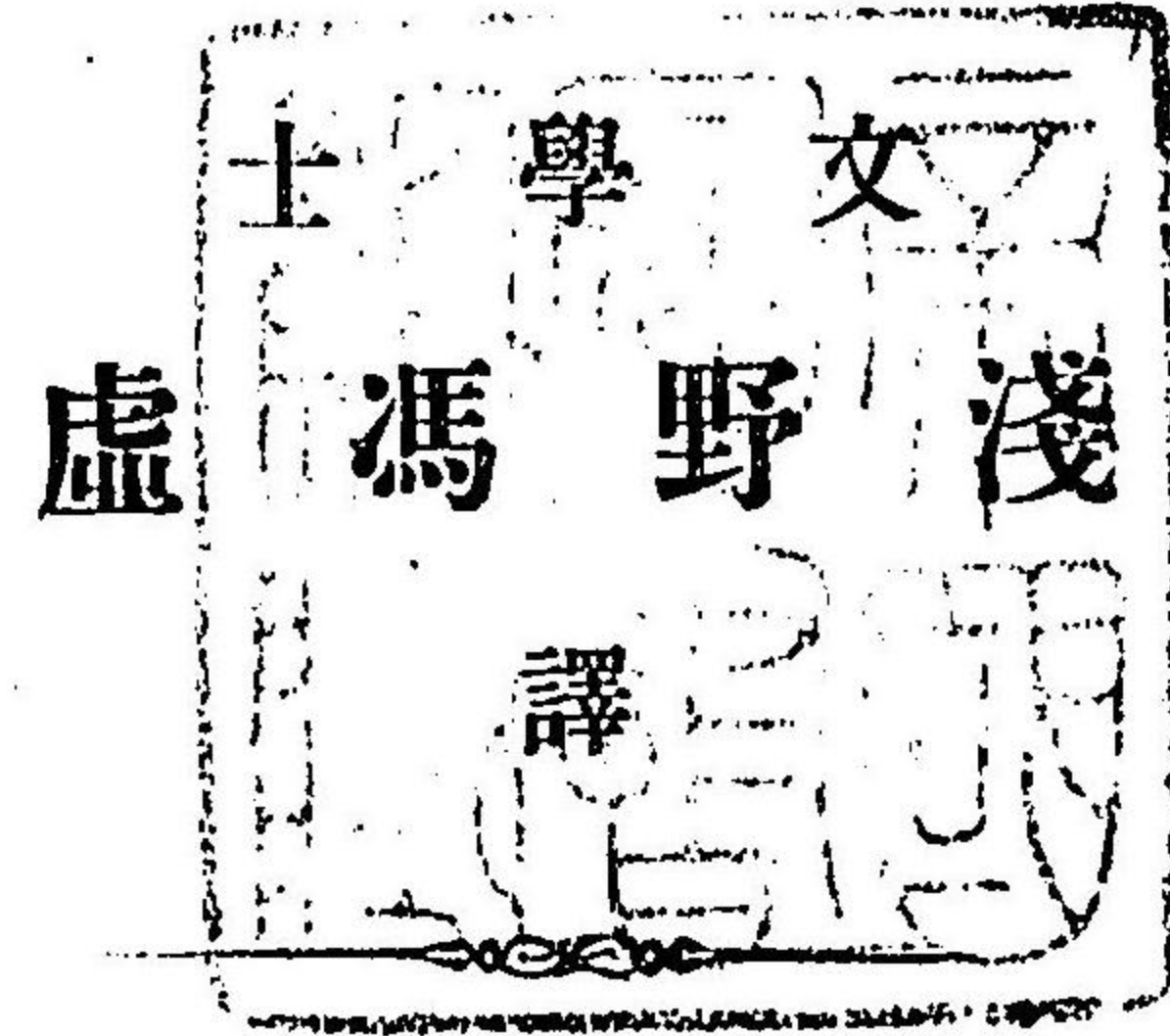
W. W. W. S. S. S.



尹澤姑射  
淺野馮靈  
共譯



78-69



# 沙翁全集

第十卷

第十二夜

發兌

大日本圖書株式會社

明治四十二年年初版





序

ゆく手は上流へ三百里、  
浪漫の水さかのぼる、  
折からしほは引きぎはの、  
滔々として矢を射る如く、  
寸を進めば尺を退き、  
あゝ瘦腕のおぼつかな。  
船はむかしの堅づくり、  
釘にゆるみは見えねども、



底につきたる蝸殼の、  
十重に二十重にいやうづたかく、  
虫の孔から漏水しげく、  
あゝ氣のもめるこの船路。  
うしろの方をふりむけば、  
幾千百の下り船、  
左に右につれ立ちて、  
一瀉千里の勢すこく、  
爰を先途とえっささ。

あゝ掛聲のいさましさ。

明治四十二年九月七日夜

馮 虚



# 十二夜解説

## 目次

- (一) 刊行及び書下しの年月
- (二) 『十二夜』の標題
- (三) 物語の出所
- (四) 梗概
- (五) 本篇の特質
- (六) 篇中の人物
- (一) 刊行及び書下しの年月



『十二夜』の刊本は一六二三年の第一フォリオ版が最初のものらしく、その以前に刊行された沙翁集、以謂クォート版中には載録されて居ぬらしい。

書下しの年月は例によりて判明はせぬが多分一六〇一年と推定される。一五九八年の秋メールスといふ人が沙翁の劇曲目録を編成して居るが、之には『十二夜』はまだ載せてない。一六〇二年二月マンニンガムといふ人の日記には『十二夜』見物の事を載せて居る。即ちこの脚本の書下しは一五九八年と一六〇二年との中間でなければならぬ。尙ほ他にも一六〇〇年又はその翌年でなければならぬ外面的證據がある。又内面的證據、換言すればその作風、氣品、措辭等から推定を下して見ても、多くの批評家は先づ一六〇一年を以て動かぬ所と見當をつけて居るのである。

## (二)『十二夜』の標題

基督降誕祭十二月廿五日から第十二日目、即ち正月の六日は往時は祭日であつて、種々の催しがあつたものだ。殊に其晩には芝居を興行するのが例であつた。さればこの脚本の『十二夜』といふ標題は極めて無造作なもので、單に第十二夜の祭禮に興行する爲めの脚本といふに過ぎない。『夏の夜の夢』なども矢張りこの流儀で命名したものである。

本篇は一名『御勝手次第』What You Will.と云ふ。元來本篇の性質が傳奇ともつかず、喜劇ともつかず、勿論悲劇でもなく、一種の雜種劇なれば、作者は『喜劇と言ふもよし、傳奇と呼ぶもよし、御勝手次第と逃げを張つたものらし。この點は『御意のまゝ』と同様の筆法だ。



### (三) 物語の出處

他の沙翁の作も大方さうであるが、この篇にも主の物語と副の物語とが入り雜つて居る。副の方は賑やかし専門の大道化の筋で、マルヴァーリオといふ氣取り屋が飛んだ赤恥をかくといふ話、これは全然沙翁の頭腦から湧き出したものらしい。主の物語には例によつて有力なる原本と見るべきものが、しかも三種迄ある。即ち第一「バナーブ・リッチ作」「アポロニアス、シラ物語」、第二作者不明の以太利の喜劇「カツガレ家」(Gi. Inganati)、第三以太利作者「ゴンザガ作」「詐欺」(Gi. Inganati)である。勿論沙翁の神腕によりて原作は立派に融和され、美化されては居るが、それでもこの「十二夜」は、頗る荒削りの作丈に、原本を脚本化したものとの感を抱かせる個所、即ち脚本と

しては確かに目觸りに相違ない個所が所々に散在する。

### (四) 梗概

爰にメッサリン市の名家に男女の雙生兒があつた。男をセバスチアン、女をヴイオラと呼び、非常に容貌が似て居て、衣服をかへれば何れが兄やら妹やら、寸分の區別もつかぬ位であつた。この二人が或る時船で某地へ赴かうとする途中、俄然難破の厄に遇ひ、同船者の過半は溺死して了つた。

幸ひ妹(雙生兒)ではあるが假りにさうさめるのヴイオラ嬢は、船長その他二三人の船員の爲めに危き生命を助けられ、イリ、ア國の海岸に漂着したものの、自分の生命拾ひが嬉しいよりは、天にも地にも掛がへのなき兄に死なれたのが悲しくて耐らない、獨り涙に暮れて居ると、船長といふ



のは、餘程親切な人と見え、貴嬢の兄御様は大丈夫死にはしませぬ、船が擡けた時分に、大きな櫓に身體を縛りつけ、浪のまに／＼に浮いて居るのを確かに目撃した、御心配なされますなと、種々慰めてくれたヴァオラも少なからず之に力を得たのみならず、廣い世の中に一本立ちとなつて見れば、たゞクヨクヨ泣いてばかりも居られず、何所かに奉公でもして見やうと決心し、船長にイリ、ア國の狀況を尋ねて見た。

すると、その話によれば、イリ、ア國の國主はオルシノ公と稱する若年の方で、まだ獨身だ。尤も近來伯爵家の世嗣のオリヴィア嬢といふ美人に懸想し、兼ねて結婚を申込むことは申込んで居るが、そのオリヴィア嬢は、近く兄に死なれて浮世を果敢なみ、男といふものを見向きもしない、従つてオルシノ公とても矢張り管なき返事ばかり頂戴して居るといふ次第であ

つた。

乃でヴァオラ嬢は、最初は、このオリヴィア嬢の腰元にてとも思つたが、船長から駄目だらうと言はれたので、急に至極突飛な新工夫を運らし、男装してオルシノ公の小姓に住み込むことゝさめ、船長の助力を乞ふた。するとこの船長も頗る茶番氣に富んだ男と見えて、早速賛成し、それから男子の服裝を新調したが、衣服の仕立、縮柄の好み、すべて兄セバステアンの通りにした。それ故いよ／＼ヴァオラ嬢が男装した所は全然セバステアンの儘、この類似が基で、後段い／＼の誤解やら椿譚やらが湧き出るに立ち到つた。故いかにとなれば、死んだと思つたセバステアンは、實は死なずして、矢張りイリ、ア國に来ることになつたからである。

さてヴァオラ嬢は、計劃通りに國主オルシノ公の小姓となり、果せ、名もセ



サリオと改め、森蘭丸然として君側に侍することゝなつたが、標致は善し、氣轉はきく、忽ち公の寵物となり、オリヴィア姫に對する戀の秘密なども打ち明けらるゝ身の土となつた。

君寵の厚きは、ヴィオラ嬢甚だ難有いが、たゞかくオリヴィア姫に對する情事を拜聽させらるゝには大に弱つた。委こそ小姓なれ、内實は妙齡の乙女である。様子がよくて位階が高く、それでお年齢の若い殿御に日夕傅いて居て、なつかしいと思ふ心を起さず居られる筈のものでない。ヴィオラ嬢は小姓となつてから間もなく、早くも公に對して人知れず熱烈なる愛情を捧げて居たのである。それに公の方では、夢にもそんなことは御存知なして、オリヴィア姫に心中立、自分などは振りむいても見て呉れぬ。ヴィオラの煩悶は察すべしてはないか。

お負けに、ヴィオラ嬢はこれから公の戀の使者の役を引き受け、オリヴィア姫を公に靡かせる爲めの談判役を引き受けることになつた。自分が愛する殿御の爲めに、他の女子を取り持つなどは随分お氣の毒な役割、神經過敏な少女などには、とてもつとまりさうな役目でなし。幸ひヴィオラ嬢はしほらしい、しとやかな、幾分女大學流の氣質の女子故、自分の戀はおとなしく自分の胸三寸に納めておき、兎も角も立派に主公の熱情を先方にお取次ぎした。オリヴィア姫は不相變公の申込には應じない、公は誠に操行もよろしく、品格もあり、學問もあり、非の打ち所なき若殿で、ムリまするが、何んだか妾は虫が好きませぬ、その奥方になるのは眞平てムリますと斷つて了ふ。

公の申込みを斷つた丈なら何事もなかつたらうが、ヴィオラ、オリヴィア兩



人の會見は他に重大なる結果を孕んだ。小姓姿のヴィオラ嬢を一と目見たオリヴィア嬢は今迄男嫌ひだなど、高くとまつた見識も何所へやら、忽ち之を戀慕するに立ち到つた。一旦は身分が違ふとか、餘りに急激に過ぎるとか、多少躑躅もして見たが、モースとなつては矢も楯も耐らない、早速家令のマルヴォーリオに命じて金剛石入りの指輪を持參せしめ、善い加減の口實を設けて無理にヴィオラに受取らせた。之にはヴィオラも殆んど當惑した。自分を男子と勘違ひして斯うしてくださるだらうが、まるで夢に惚れてるやうなもの、的のないこと夥しい。ホんに變装などいふものは罪の深いものさネと、この時しみくくと獨語したのであつた。

兎も角も主君の許に出頭して談判不成立の旨を報告して見ると、公は尙ほ未練を残して思ひきれない。翌日又も行つて來いと、の命令、乃て又ヴィ

オラはオリヴィア嬢の許に出頭して公の愛情のお取次ぎをつとめたが、モ  
「姫は公爵のことなどは耳にもかけない、大胆に露骨に、そのヴィオラに對  
する愛情を發表し、是が非でも夫婦になつて呉れといふ。ヴィオラは一生懸  
命拒絶したが、先方ではいッかな聞き分けない、何うあつても言ふことを  
さけといふ。ツマリこの所、蛇、蛙、蛤、蝮の合戦の體、オルシノ公はオリヴィア嬢  
に惚れ、オリヴィア嬢はヴィオラ嬢に惚れ、ヴィオラ嬢はオルシノ公に惚れて、際  
限なきグル／＼めぐり、このまゝでは百年経つても埒のあくべき模様な  
し。

それはさておき、ヴィオラ嬢はオリヴィア嬢の邸からの歸途に飛んだ災難  
に遭遇した。爰にアンドロイーエーグチークと稱する馬鹿侍が居て、兼ねて  
オリヴィア嬢に懸想して居たが、近頃嬢がセサリオ少年(即ちヴィオラ)を可愛



がる様子を見て大に業を沸かし、終に決闘を申込んで来たのである。ヴィオラは之にはほと／＼當惑した。姿こそ男子だが、内實は虫も殺し得ぬ妙齡の佳人、決闘などは思ひも寄らない。仕方がない、妾は女子でムリですと白状でもしやうかと途方に暮れて躊躇して居ると、突然其所へ通り合せた一人の男、ヴィオラの姿を一と目見るや否や、さながら百年の知己でもあるやうな面持にて飛び込んで来て、相手のアンドロイーに向ひ、決闘の相手は拙者が引き受けると言ひ出したのであつた。

知らぬ他人から何故突然援助を受けるのか、ヴィオラは夢に夢見る心地、たゞ意外に呆れて居ると、忽ち又捕手の役人がその場に現はれて、そして右の人物を御用の聲と諸共に逮捕することになつて了つた。所が、この場に於ける右の人物の言ひ草は實にヴィオラの耳に不思議とも不屈とも言

ひやうのないものであつた。先づ恁麼ナ所で逮捕されたのは貴所の後について来たからだと思ふを並べ、そして先刻御預けの財布を返して呉れといふ、財布などを預つた覚えのないヴィオラは呆れ返つて、その旨を答へると、先方は益々怨めしさうな顔をして、薄情だの、不實だのと言ひ、役人に促がされて立ち去る迄散々ヴィオラを罵つた。罵られても別に良心に疚しいことはなかつたが、たゞその際に、彼はヴィオラを捕へて、一度セバスチアンと呼んだ。この一語はヴィオラの全身に電氣のやうに感じた。さてはわが兄様は矢張り救はれて居るのではあるまいか、そして自分等二人の容貌の類似から自分を兄と勘違ひして居るのではあるまいか。若しそうならばうれしいがと、一道の光明が前途に輝くを覺えた。

この想像は果して其通りであつたので、今しも捕へられた人物は、名を



アントーニオと呼ぶ船長、其手にセバステアンを救ひ上げたのであるが、高雅な上品なセバステアンを見ては崇敬愛慕の念むらくと禁ずるに由なく、セバステアンが此イリ、アに来ると言ひ出した時は、梁はイリ、アが自分の敵地であるにも係らず、とう／＼我慢がしきれず、後から追ひかけて来た始末、それから先刻當市に着いた時は、自分の財布をセバステアンに渡して、見物がてら小間物でもお買ひなさるがよいと言ひおき、自分は獨りて旅宿に待つて居たのであるが、セバステアンは出懸けたなり、中々歸つて來ぬので心配のあまり危険と知りつゝ、搜索の爲めに爰まで來て見ると、セバステアンのまゝのヴ、オラが今しも決闘せんとする場合、乃て先刻のやうな話となつた譯で、兎に角アントーニオの肚裏では、あれ程に親切にしてやつた癖に顔に見覺はない、財布も受取らぬと吐かし

たセバステアンは犬猫にも劣る奴ぢやと大立腹であつたに相違ない。それはさておき、この逮捕騒ぎで決闘は中止となり、ヴ、オラはホッと安心の溜息をし乍ら歸宅して了うた、引き違ひて、この場に通合せたのは兄のセバステアンであつたのを、知らぬが佛のアンドリーはセサリオのもりて、突然再び食つてかゝり、ボカリとやつたが、今度は正眞の男子、而も中々勇士ときて居るので、その怒り方は一と通りでなく、忽ち利息をつけて撲り返した揚句に、ガラリと劍を引き抜いて、いざ尋常にとつめよせた。これに誰もかまはずに居れば、何れアンドリーが殺されるか、それとも逃げ出すか、落ちだつたらうが、オリヴァ姫の仲裁があつて圓く納まつた。それは善いが、今度は姫がセバステアンをセサリオと誤認して了ひ、眼や口に色々優さしい事を言ひ乍ら、とも角も此方へお出てくださいとい



ふと、今度は正眞の男子だから、勿論美人から大事に取り持たれて、悪るい氣持のする筈はなく、ノコノコ姫の後について行つた。

これから二人は一室で話し込んだ。姫の方では、今迄臆鐵砲ばかり食はせつゞけのセサリオが、ガラリ豹變して居るので嬉れしくて耐らず、又セバスチアンの方では、初對面の美人から据膳をされて、バテ若しやキ印てはないかしらと一坦は疑つても見たが、併し多勞の家來を使つて、萬事萬端立派に切つて廻はして居る姫の様子を見ては、狂人とも思はれず、仔細ぞあらんと腹を据へて、トウ／＼姫の勸めるまゝ、早速僧を呼んで内々結婚の式を擧げて了つた。一寸散歩の序でに、これまで一面識もない伯爵家の世繼の姫と結婚して濟まして居るなどは、セバスチアンも随分氣の早い、イヤ寧ろイ、氣ナ男と言はねばならぬ。

これからセバスチアンは船長のアントーニオに事情を告げるべく外出した。その不在に入れ違つてオルシノ公は、ヴィオラ其他従者を引連れ、オリヴィア姫訪問の爲めに來着した。すると門前に現はれたのが、先刻捕吏の爲めに搦めとられた船長アントーニオ、公爵は之に向ひ敵地なるわが領地へ何故汝は來たのかと尋ねると、アントーニオは、セサリオを指して、此奴の爲めに迷はされて附いて來ました。これまで親切といふ親切は仕盡して居るのに、拙者が先刻も役人に捕へられたのを見ると同時に、掌を翻す恍惚様、什麼ナ狡い奴はないと散々不平を並べる。

その話がまだ濟まぬに、門内から歩み出たのはオリヴィア姫であつた。公爵は不相變天女の再來など、大騒ぎをしたが、姫の方は、モ、セサリオと夫婦氣取、公爵のことなどは振向いても見ず、コレ、セサリオ、何時までお前



は公爵のお供などをして居るのです。お前はモイ公爵と同一資格の立派な身分であります。此方へ御座れと促せども、**ヴオラ**の方では勿論夫婦約束などをした覚えはないので只呆れるばかり、公爵は又公爵で、さては自分の戀人は自分の小姓奴に横奪よこさらされたか、エ、残念ナ、そのまゝにしておくものかと地團太踏むといふ騒ぎ、兎に角**ヴオラ**が一番不信不義不貞不忠の悪者となつて大弱りの爲體ていたいく。

するとこの時俄然として奇妙奇天烈な現象が降つて湧いた。外でもない、**セサリオ**が急に二人に殖えたこと、今度の**セサリオ**は**オリヴァ**姫をつかまへて、コレ女房と言つたやうな挨拶をなし、又側に居た船長の**アン**トニオをつかまへても、懐かしげな物の言ひぶり、今迄の**セサリオ**とは全然様子が違つて居る。

いふ迄もなく、これは**ヴオラ**の兄の**セバスタアン**で今迄互に溺死したと思ふて居た兄妹が再び爰に名告り遇ふことになる。お蔭でこれまで起つた数々の疑團も早速解けたが、驚いたのは**オリヴァ**姫であつた。今迄女子の**セサリオ**に惚れて散々口説いた揚句、いつの間にか、ラツカリその兄の**セバスタアン**と結婚して居た。これ位とぼけた話はないが、この交換は當人同志の共に歓迎する所であつたから先づ善いが、頗る器量をさげたのは**オルシノ**公爵、あれ程シッコク口説いた甲斐もなく**オリヴァ**姫を他に奪はれて了つたが、元來公爵は物に拘泥する資質でないと思へ、早速臨機應變の處置をとり、今迄小姓として愛した**ヴオラ**嬢を今度は借老の夫人として愛する氣持になつた。乃て同日同刻に二た組の新夫婦が出来るといふのが此篇の大綱で、枝葉に亘れば**オリヴァ**姫の家令**マルヴァーリオ**



が姫の色男を氣取つて酷<sup>ひど</sup>ひ目に逢ふ話、姫の叔父のトービベルチといふ徒ら男が、腰元のマリアといふ小作りの徒ら女と結婚する話などが、景物的に入り亂れて居る。

### (五) 本篇の特質

一言に言へば、『十二夜』は諷意を寓せるロマンスであつて、徹頭徹尾ユーモアを以て漲つて居る。家令マルヴァーリオが假艶書を以て一杯食はされる所、莫迦侍のアンドリユーが、トービその他から愚弄の種となる所などは、作者のユーモアが最も表面に現はれた所で、普通の讀者にもこれはずぐにも會得される。オルシノ公がオリヴィア姫でなければならぬやうな事を言つて居たくせに、ケロリとしてその愛をヴィオラ嬢に移すこと、又オ

リヴィア姫が男子は禁物だなど、吹聴した、その舌の根がまだ乾かざるに、美少年を見るや否や、早速惚れることなどは、これは頗る隠微なユーモアで、之を描いた作者の胸中に割つて入ると、初めて可笑味が湧いて来る。兎に角、『十二夜』を始終するのはこの二種のユーモアで、それに浪漫的な色彩が加味し、沙翁の喜劇中で、最も配合の妙を得たるものと言はれて居る。

### (六) 篇中の人物

已にこの篇が諷意を寓し、ユーモアを以て始終する以上は、弱點に富んだ人物に充ちて居るのは想像されるだらう。げに、『十二夜』中には圓満な紳士だの、可憐な淑女だのといふのは殆んど無い、何れも一種の變り物、疵物ばかりであるが、中に一二の例外はある。ヴィオラ嬢はその例外の一人であ



るヴィオラは優さしくて、温雅で、いかにも女らしい女である。その性質は男装してから一番よく分る。一體沙翁集中には男装した女子が中々多いが『御意のまゝ』のロザリンドは快活にしてよく困難と戦ひ、『ヴェニス商人』のポルシアは智力心力優に器量にして三舎を避けしむるに足りた。所がヴィオラには更に之がない、少し危険が迫ると、忽ちに當惑して度を失ひかける。従つて見識などは決して高くない、浮氣な公爵の一顧を得て満足して居る。ポルシアやロザリンドは決して斯んなことでは承知しなかつたらう。

オリヴィア姫は中々の氣位家で、ツンと濟まして意張りくさる。始終伯爵家の姫君で御座い、絶世の美人で御座いといふ看板を鼻の頭にブラ下げて居る。勿論悪人でもなければ、馬鹿でもない、統御の手腕、健全なる常識さ

ては淺からぬ親切心等中々捨て難い所もあるが、しかし餘り可愛らしくない。公爵の縁談を拒絶する文句などはイヤに氣取つたキザなもので、什麼見ても肺肝から出た眞贋の言とは受取れない。果然公爵の小姓の美少年を一と目見るや否や、すぐ之に懸想した。自分でも身分が違つて妙でない位は百も二百も承知の上だが、元來我儘な生活に慣れて居るから、思ひ立つては矢も楯も耐らない。到頭結婚を申込み、見事肱鐵砲を食ふなどは、餘り見上た器量でもない。最後に漸く目的を遂げたと思へば、それは案外にも別人であつて、ツマリ一面識のない男を口説き落したのであつた。などは益々この種の婦女子の陥るべき運命を遺憾なくあらはして居ると言ふて可からう。併し全體に浪漫的色彩が懸つて居るから、讀者は格別の女に悪感情を催す迄には至らず、その滑稽なる失敗に對して、詩的空想



を動かして喜んで居る位のものだ。

今一人出て来る女子は腰元のマリアで、これは目から鼻へ抜けるやうな氣轉者、口も八丁手も八丁で、抜目といつては寸分もない。氣取り屋の家令マルヴァーリオを手玉に取つて散々な目に逢はせたが、これは寧ろ姫の親戚のサートビーの歡心を買ふ爲めの狡猾手段とらう。トビーをまるめ込みてその令夫人と出世するに至る迄、黒幕となつて縦横の策略を逞ふして居る。これ位の女が藝者にてもなるならば縦令三味線やおどりは出来なくても餘程腕を振ふべき餘地はあるだらうと思はれる。

オルシノ公といふ人は早く言へば氣取屋の貴公子だが、別にキザではない。上品で、詩的で、奇麗な文句を並べるのが上手で、平生多感多情がつて居る。斯んな人に限つて深い感情だの、厚い同情だのといふものは先づ無

い。可愛いのが御自分様が第一で、戀に罹つても、獸身的の深い戀などは馬鹿々々しくて出来ない。さればオリヴァ姫を見そめた時は、口にこそ色々美しい感想を駢べもすれ、何時も自身出馬して口説く丈の面倒は見ず、御自分様は、音楽などをきく乍ら、御輿を据へて何もせず居る。最後にオリヴァ姫が他人の有となる、ケロリとして急にその所謂戀をヴァオラ嬢に移して済ましてゐる。之を見ても讀者は勿論驚きも怪しみもしない。初めから讀者はオルシノ公を信用して居ない、凡そそれ位の見當の貴公子と多寡をくくつて居た。

家令のマルヴァーリオは滿更棄てた人物でもない。養真面目で、正直で、職務に忠實で、そして敏腕でもある。たゞ一ツ大缺點がある。それは即ち馬鹿に強い。自惚病で、自分を完全無缺の大明神と空想的に祭りあげ、それを標



準として他を律するから、他人は皆馬鹿に見え、疵だらけに見えて耐らぬ。間断なく叱言と並べ、人の缺點拾ひに忙殺される、極めて偏狹である。このやうな人に限つてユーモアといふものは必らず無いに極つて居る。戯談を言はれれば、ムキになつて怒り、人が酒でも飲んで歌でも歌ふのを見れば、不品行不行儀と譏める。大抵の人間は、これではやりきれない。敬して遠ざけるか、蔭で悪口を叩くか、それとも思ひ切つて復讐を工むかしたくなる。かのマリア、トビー一味の輩は最後の手段に出て、同人の「自惚病を巧みに利用して、立派に復讐をしてのけたが、其復讐はチト酷過ぎた。マルヴァーリオが、暗室に監禁されて冤を訴へる所は、可笑しくもあるが、又可哀相でもある。此際彼が蒙れる屈辱は殆んど悲劇の域に達して居る。讀者の方でも、オリヴァ姫や、オルシノ公と同様に、幾分か同情を惜まぬだらうと思ふ。

サートービは酔漢で、悪戯小僧で、又他人の金子で一杯飲みたがる意地汚な、餘り品の善い男ではないが、其かはり、頓智は湧くが如く、世才にも長け、そして勇氣にも富んである。仕方のない男と一方に貶し乍らも、他方に於ては面白い奴、可笑しな男と、ツイ惡意になつて了ふやうな人物、幾分ファルスタフの面影がないでもない。彼の才智は、よくマルヴァーリオを弄び、アンドリーを手玉に取るには足りたが、しかしマリアに對しては顔色がなない。マルヴァーリオが自分達の詭計に掛つたのを笑つて居る間に、自分がマリアの張つた網に引ツかゝり、その虜となつたなどは、大笑ひだ。察する所終生此女房の前には餘り頭があがるまい。

アンドリーに至りては、たゞトビーの踏み臺に過ぎざる薄ノロの臆病男、決闘せよと言はれて決闘し、滞在せよと言はれて滞在し、金子を絞られ、



口車に載せられ、果ては腦天を割られ損得と言つては爪の垢ほども取らぬ癖に、最後まで別に後悔もせず、トードの尻を追ひまはす。お氣の毒と言ひたけれど、その張合なき男なり。

ヴイオラの兄セバスタアンは一向箱中にてお目にかゝらぬ人物だが、それに顯はれた所では、淡泊で、露骨で、小六ヶ敷い議論だの、女らしい感情だのは大嫌ひ、何事も手取り早く、さつさとやつてのけ、善いものは善い、悪いものは悪い、で物に拘泥せず、埒のあくこと夥しい男らしい。ヴイオラの女らしきに對し、これは徹頭徹尾男らしく、篇中で最も人好きのする人物の一人だらう。勿論餘り伶俐とも、大人物とも、見えないが、オルシノ公などよりは行々必らず人望を得て仕事をする人に相違ない。船長アントーニオが之に心服して居る所を見ても、大概察せられるのである。

TWELFTH NIGHT.

十二夜 一名 御勝手次第





公爵が音楽に身をまかせた様子

# 十二夜

## 第一幕

### 第一場 オルシノ公爵館の一と

#### 間

公爵館の世嗣の姫オリヴィアを見そめ、之に結婚を申込みたれど拒絶せらる、爲めに侍臣等を相手に一種の煩悶に耽る所に公爵の空想的にして気がかほり易く、やゝ不眞面目なる性質を伺ふべし

オルシノ公爵、侍臣キニオ、その他近侍登場、楽人数名随伴す、

### 登場人物

- オルシノ公 イリ、アの太守
- セバスチアン ヴィオラの兄(雙生児)
- アントーニオ セバスチアンを助けたる船長
- ヴァレンティン オルシノ公の侍臣
- キニオ
- サー・トビー・ベルチ オリヴィア姫の叔父
- サー・アンドリュウ・エーグチーク オリヴィア姫ニ懸想せる武士
- マルヴォーリオ オリヴィア姫の家令
- ファビアン オリヴィア姫のお抱ひ
- 茶坊主 ヴィオラを助けたる人
- 菜船長
- オリヴィア姫 伯爵家の世嗣

ヴィオラ 嬢 (男裝してオルシノ公の小姓となる)

マリ ア オリヴィア姫の侍女

其他隨員、僧侶、水夫、樂手、從僕等

### 場所

イリ、ア國の市府及びその附近の海岸



公府 戀する身に音楽が粗ならば續いて奏べよ、腹ふくるゝ迄聴いて、聴き飽いて、この心胸の飢が癒るまで所望であるぞ。

樂人連演奏を始む、

ハテ又しても例の曲調ぢやナ！そことも知れず消え行く嬌々の響例へば董咲きたる堤坡の上を薰風の掠むる心地香を奪ひ又香を齎らす……が、モ！飽いた、よしにせい。曩時の甘味は最う得られぬ。さてもく移ろひ易く留まり難きは、げにこれ戀の姿、かれも一時、これも一時、千金の寶も凌背の意氣も、一坦爰に赴けば切那を待たずして空々寂々、跡方さへも滅びて了ふが常ぢや、これほど正體の定まらぬものが世にあるものか。

キユリ オ お上には狩獵になりと御出ましなされませぬか。

公 何を狩るのぢや？

キユリ 鹿でムります。

公 ハテこの掛け換へのない余の胸は正にそれぢやよ。一坦オリヴァ姫を離間見しとき、餘りの高潔に濁れる空も澄み亘るか、と怪まれ、その瞬間に余の一身は忽然として一頭の牡鹿と化し果てた。爾後寸時の小息みもなく、無慈悲無情なる煩惱の犬から追ひ立てられて居るぞ。

と空想を混へ譬句を弄しつゝ、半ば、眞面目に半ば、洒落れて失戀を語る、公府の言葉は、アクテオンと稱する獵夫が、女神沐浴の現狀を窺ひし爲め其身牡鹿と化し、獵犬の爲めに八裂きにせられたりとの希臘の故事を引きたるものと知るべし、  
ヴァレンタイン登場。オリヴァ姫の許に派遣せられ、今しも歸來復命の所

おゝ今戻つたか。コリアく先方の返答は何とあつた？



ヴァレン お上に申し上げます。小臣は到頭姫の御目通りが協ひませぬ。して  
 腰元を以ての御挨拶には、これより七年の春秋を悶す迄は、御空の星  
 辰にもこの素顔は示されぬ。身は尼寺の尼そのまゝ、外出の度毎面帕  
 にかくれ、世をば果敢なむ涙の雨鹹らい露に袖をぬらさぬ日はない  
 ぞとの御答辭にムります。これと申すも皆亡られし御兄君に對する  
 御追慕がさせる業、未長うそれを忘れじとの優しい御心根と存じま  
 する。

公 あゝかほど兄思ひの優さしい胸に、一坦戀の征矢が立つことあり  
 て他し愛情の滅びしとせよ、——圓満無垢のその胸にいとしい人の  
 たゞ一人宿るとせよ、いかに濃かな愛情を傾けつくしてくれること  
 ぢやらう。いてこれより身どもを花園に案内致せ、戀の冥想に耽るに

は花蔭に及ぶところはな

と一同退場

### 第二場 海岸

筋 双生児なるセバステアン及びヴァイオラの兄妹は海上にて難船  
 し双方離れ々々になり互に其生死を知らず、やがてヴァイオラ嬢はイ  
 リ、ア國の海岸に漂着し、これより男装して國主オルシノ公の小  
 姓にならんとす

ヴァイオラ嬢、船長、水夫数名登場

ヴァイオラ アノ此所は何と申す邦土でムりますか？  
 船長 お嬢様、此所はイリ、アと申します。

ヴァイオラ嬢打ち萎れて



ウイオ イリ、アなどに來ても、仕方がない、お兄様は黄泉の客になつて被居るのぢやいのを！

と絶望的に首ひ放つ、やがて氣をかへ

でもまだお兄様はお亡去になつたとも限りはせぬ、卿達はアノ什麼御思ひかいな？

船 お嬢様、貴嬢ぢやとて危い所でヒョククリ命拾ひをなされましたのでムりませう。

ウイオ ホンにさうぢや〜、お兄様もヒョククリ命拾ひをして被居るかも知れぬ。

船 さうでムりますともお嬢様天運といふものは實に不可解もので、滅他に力を落すべきぢやムりませぬ、實はあの時船が撞けて貴嬢を

初め命拾ひをした仲間が漂ふ端艇に取り縋つて居ります最中、お兄様には死物狂ひの叫嗟の工夫、波にもまるゝ檣に確乎と軀を縛りつけられ、先づまア海豚の背中に馬乗りのアライオン其儘といふ恰好、そして波のまに〜心安く、何所ともなくゆられて行くのを、拙者はチャンとこの眼で見えずなるまで見送つて居ましたので。

アライオンは希臘の樹人、ある時海賊の難に逢ひて、海中に飛び入りしが、彼の吹ける笛に感動せる海豚の爲めに救はれし故事あり、

ウイオ それはまアみみよりのお風評、この身が虎口を脱れたのを思ふにつけ、又卿の依もしい話をきくにつけ、お兄様の御無事な顔を拜まれやうとの希望が胸に湧いて來ましたわいな、それはさうと卿はこの土地を御存知でムりますか。



船 エーモにお嬢様存じて居る段ぢやムりませぬ。拙者は、爰から歩いて、モノ、三時間とは掛らぬ土地に育ちましたもので……

ウイオ 御領主は何誰でムりますか？

船 家柄もよし人柄もよし、誠に申分のない殿様で。

ウイオ シテそのお名前は！

船 オルシノ公と申します。

ウイオ オルシノ公と被仰る？それならお亡父様から所中そのお風評を伺つて居ましたわいな。その頃はまだ御獨身との事ぢやったが……

船 現今でもさうで……イヤ兎に角先達まではさうでムりました。拙者はツイ一月以前當地を出立したのでムりますが、その頃専らの巷説は……イヤ兎角高貴な方々の風評は下司の口にはのぼり易いも

のでムるが、その頃の巷説では、殿様がオリツァ姫と申す美しいお方に、深い御思召がムるとの事てナ。

ウイオ シテそのオリツァ姫と申すは？

船 或る伯爵家の御姫様で誠に貞淑な御人柄、一年前に父君に先立たれ、その後は一人のお兄御様と御一所でムりましたが、その方が又間もなくお死去それからと申すものはこのお兄様に對する御悔恨のあまり、一切男子方との御交際をお廢止になられて居るげに伺ひました。

ウイオ まア妾は那麼お方に御奉公がして見たい。そして身の振方が決る迄、浮世を離れて人知れず、月日を送つて見たいものぢや。

船 そりアちと六ヶ敷い御相談かも知れませぬ。オリツァ姫はいかな



る依頼も一切お断絶縦令公爵のお言葉でもさゝめが更に無い位で  
ムりますからナ。

ワイオラ 嬢何か思案をしながら彼方此方に歩を運びつゝ、

ワイオ アノ船長さん、妾は卿を立派な方と思つて折入つて御相談致し  
ますので、勿論世の中には外見と肚裏とは似もつかぬ人間もありは  
すれど卿に限つてそのやうな事は決してないものと信じます。妾  
の相談といひますのは是非卿のお骨折でこの身の素性をかくし、浮  
世をしのぶ假の姿、首尼克一ツの志望を遂げさせて戴きたいと思ひ  
ますので、勿論後で御禮は幾何でも致します。實は妾の志望といふは、  
公爵様に御奉公がして見たいのでムります。

と一歩船長に近きて、聲の調子をわろし、

就ては妾を小姓姿にかへさせて、宮仕への世話をしてくだされませ  
ぬか、決して卿に無駄はかけませぬ、妾は音楽にかけては、聲の方も又  
糸も一と通り心得て居るほどに必然殿様の御氣に召さぬことはあ  
るまいと思ひます。後の事は又後で何とか工夫もつくといふもの、兎  
も角も人に知せられず、こつそりとお世話をして戴きたいので……  
船 宜しうムります。貴嬢が殿様のお小姓役なら、拙者は貴嬢の啞の後  
見、此舌が若も喋るなら、この兩ツの眼が盲れても苦しうない。  
ワイオ 難有う存じます。それでは萬望御案内を。

と一同退場



### 第三場 オリヴィア姫邸の一と間

筋—オリヴィア姫の腰元マリア、姫の親戚にて大悪戯者なるサー・ト  
ービ・ベルチ及びサー・アンドリュー・エーグチークと稱する間拔武士  
の三人がふざける場、後者はドービに教唆せられてオリヴィア姫に  
懸想す。

トービ・ベルチ及び腰元マリア登場

トービ 一体全体宅の姪どのは、兄貴の一人や半分に死なれたとて何故  
彼處にベソ／＼泣いて暮らして居るのじやらう。心配ほど身体は毒  
なものはないテ。

と一杯機嫌の體、

マリア 全体まアトービ様、恁處に深更にお出になつては困つて了ひま  
すよ、半夜のお客様はお姫様が何よりお嫌でムります。

トービ 好こそ物の上手也、嫌ひではツマリ下手かな。

マリア エーでも、トービ様少しは嗜といふものもあるものでムります。

トービ 拙者に嗜をよくせい！莫迦を申せ、この上修飾込んで什麼なる  
ものか。この衣服で立派に酒も飲め、又この靴で酔ふに差支はない。こ  
れで悪るといふなら勝手にするが可い。

マリア 貴所様は毎時もさう御酒に酔つて被居るのが始終は御身の不  
利益でムります。昨日もお姫様がその御風評でムりました。風評とい  
へば、ホンに貴所が先夜お連れなされた可笑しな方の御風評も出ま  
した、アノお姫様に懸想して居るとやらいふ……

トービ 誰のことぢや？サー・アンドリュー・エーグチークか？

マリア 左様でムります。



ト一ビ 彼奴なら、イリ、ア國中で實に見上げた大人物ぢや。

マリア それが什麼したと被仰るので？

ト一ビ イヤ、あれで年額三千磅の収入があるのぢやぞ。

マリア それしきの金子は一年經つか經たぬ間に費ひ果して了ひます、根が莫迦でそして蕩樂者でムリますものを。

ト一ビ 口に税が掛らぬと思ふて悪口を申し居る！あの方は、あれで四絃琴の名人又すら〜と三四國の言語を操り、その他遊藝といふ遊藝は何でも心得て居られる方ぢや。

マリア ホンにあの方位遊ぶ藝を心得て居たら見事に藝て身を滅ぼせるに相違ない。智慧が身体中に運び切らぬ上に珍らしい喧嘩好き、その癖大の臆病者で、仕掛た喧嘩の腰を折るのが名人ときて居ますか

ら、世話はムリませぬ。行々は懸て路傍に斃死、グ！ともゲイとも言はれない身の上になるものとチャンと衆口が相場をきめて居ます。

ト一ビ そのやうな悪口を申す奴は確かに大莫迦の剣身ぢや。誰ぢや、そう申したのは？

マリア まだそれ丈ではムリませぬ。御酒を飲んで騒ぐ事にかけてはあの方の善い相棒が貴所ぢやと申すことで…。

ト一ビ それはソノ宅の姪御の爲めに祝杯を舉げて飲んでやるのぢや。乃公の喉笛が塞がらぬ限り、又イリ、ア國中の酒が品切れとならぬ限り、飽まで祝杯を舉げる覺悟で居るとは知らぬか。苟くも脳味噌が、風車のやうにグル〜空廻轉を致すまで家の姪御の爲めに祝杯を舉げぬ位の奴は餘ッ程臆病な草履取り根性の脱けぬ、言ふかひなし



に相違ない。ちとコラ女！氣をつけい！サーアンドリュース・エーグチー  
クどのが御座つたぞ。

サーアンドリュース・エーグチーの登場

アンド サイ・トールベルチ殿！

と入りがてに大聲に呼び、やがて顔を見て、

やアこれはサイ・トールベルチ殿！

トールベルチこれは御機嫌で、アンドリュースどの！

アンドリュース、マリアを見て

アンド 何時もあかはりがないのでありますナ、

マリア 貴殿さまにも、

と厭な顔をする

トールベルチ これく口説り玉へ、アンドリュースどの、口説り方ぢやよ、  
アンド ナ……何んの事でムりますので？

と解し得ず、

トールベルチ 腰元の君をさ、

アンドリュース勘違ひして

アンド これはく口説り方さま、以後は何分御別懇にお願い申します。

マリア 妾の名前はマリアでムります。

とツンとする、

アンド ハイく口説り方マリア様でムりまするか、以後は……

トールベルチ これく遠つたく。口説るといふは、挨拶して口説いて、しなだ  
れて、横目をつかつて、そして突撃することぢやよ。



アンド ハテ拙者は爰で此方を突撃など致す了簡は毛頭無いのであります。全体ソノ口説るといふ文字の意義は、突撃致すことを指したもののなので？

マリア 立ちあがりて

マリア 妾はこれで失禮致します。何うぞ御ゆつくり遊ばせ。

トービ コレ／＼アンドロ／＼どの、このまゝ指をくはへて當の敵を見のがすやうな、ソんな未熟なお手際では、以後忘れても腰の物を抜き玉ふな。

アンド コレ／＼御女中どの、このまゝ指をくはへて貴女を見逃がすやうな拙者のお手際ゆゑ、忘れても腰の物は抜き度うないであります。トキに御女中、貴女の眼から餘程拙者達が甘く見えるのであります。

カナ

マリア 嘗めたことがないから存じませぬ。

とマリア退場

トービ オイ／＼大將一杯きこしめして威勢をつけなければ駄目でムるぜ。今の受大刀ッたらありアせぬ。

アンド 先づ左様でムりませうナ、尤も酒の爲めに受大刀になつた場合は何遍も御目にかけたが……。元來拙者の智慧は何うも十人並、格別取り立てゝいふ程のものではムりませぬ。これと申すも平生牛肉を大食する所爲で、それが智慧の毒になるらしいのであります。

トービ 御尤もでナ。

アンド 早くさうと氣がついたら斷然肉食を中止致す所でムりました。



時に明日は拙者は非歸宅せにアなりませぬ。

トービ *Pourquoi?*

と佛語にて尋ねる、「何故の意、」

アンド 「ブルクオツ」って一体何てあるのですか？ 歸れと申すのか、それとも歸つてはならぬと申すのか何れでムりますか？ いや拙者も、劍術だの、舞踏だの、それから熊の喧嘩だのと申すもので頭腦を痛める時間で、外國の言語を學んであげば宜しうムりました。悪るい癖があつたものでムりますナ。

トービ さうすれば貴所の頭の毛髪だつて、さうモジヤ／＼しては居なかつたらうに。

アンド 勉強すれば頭髪まで立派になりますので？

と眞面目に尋ねる

トービ さうでムるとも！ 手入れをしなければ頭に悪るい癖がつきます。

アンド それでもこの頭髪は拙者に似合ふて居るでありませんか、いかゞでムりますか？

トービ 似合つて居る段ぢやムらぬ、ピンと押ツ立つて居る所は、まるで絲竿に麻が搦まつて居るやう、一ツ百姓の内儀に依んで、貴殿の頭を膝ツ子の間に突き込んで紡がして見たいものぢや、

アンド トキにこりア實際の話ぢやが、トービ様、拙者は明日歸宅致す考であります。とてもオリヅア姫に御目通りの儀が協ひさうもなく、よしんば協ひましたにせい、拙者をお相手にしてくださる見込は千に



一ツも六ヶ敷いであります。ツイ御近所の公爵が、縁談を申込んだといふ事でムりますからナ。

ト一ビ イヤ大丈夫、あの公爵などは、腕鐵砲でムる。拙者の姪は年輩も、身分も器量も、自分より立ちまさつて居るものは相手にしませぬ。拙者はチャンと姪の肚裏を聞いて知つて居る。大將、活智がないことを言ひ玉ふな、充分の希望がある。

アンド それならモ、一ヶ月ほど逗留すると致しますでムります。拙者は斯う見えても、餘程人並外れた所がムりますので、やゝともすれば、舞踏、狂言、酒宴の類が面白くてならぬことが折々ムります。

ト一ビ 隠し藝などは御上手でムるかナ?

アンド それはモ、イリ、ア國中の何人にも決して負けないのであり

ます。尤も位階が上では敵ひませぬ。又年輩が上でも困る。

ト一ビ 「ガリアード」は御上手でムるかナ? (活潑な舞踏の名)

アンド イヤ拙者の脚の擧げ方ときては十八番でムる。

ト一ビ 拙者は羊の肉の揚げ物を食べるのが十八番で。

アンド それから拙者は後退の業にかけては、イリ、ア國中の何人よりも上手なつもりであります。

ト一ビ これ、これ程藝があるなら、何故それをお見せにならぬのぢや? 何故箱入りにして藏つておかるゝぢや? 箱から出せば塵が掛つて困るといふ譯でもムるまい。先づ寺院詣りでもする時は往路には「ガリアード」を踏み、歸路には「コラント」でも踏み玉へ。(コラントも活種) さすれば拙者も散歩には「ジグ」を踏み、小便は「シンクパス」でやらか





……やち望所が方げ舉の脚の股貫[ピート] [々々上極、ハア！く高と些せら、ハア

します。いかゞてゐるな、これが  
荷くも身についた藝を隠して  
おくべき時世でゐるか。脚の恰  
好の素的に結構な點から考へ  
ると、貴殿は確かに舞踏の名人  
となるべき使命を帯びてこの  
世に生れ落ちたのぢや。

アンド イヤ拙者の脚は全く丈夫  
であります。殊に緋色の足袋を  
穿きますると格別似合ふので  
あります。早速何を騒ぎ方に取

りかゝりませうか。

トーピ 勿論のことぢや、早速貴殿の脚の舉げ方が所望ぢや〜。

言はれてアンドロー、早速奇妙な姿で踊る。

アハ、ハ、モ些ツと高く！アハ、ハ、ハ、極上〜！

と兩人退場

### 第四場 公爵館の一と間

筋 ヴィオラ嬢は、策謀の計を遂行し、男装して名をセサリオと改め、  
オルシノ公に仕へてその小姓となり、かくて公爵の命をふくみて  
オリヴィア嬢の許に戀の使者として赴くこととなる。その時ヴィオラ  
嬢は既に公爵に對して愛情を催し居るなり、  
侍臣ヴァレンタイン及び男装せるヴィオラ嬢(小姓セサリオ)登場



ヴァレン コレ、セサリオどの、萬が一にも主君の寵愛がこのまゝ永く續くものとすれば、卿の立身出世は目覺しいもので、ムらう、卿が御奉公を致してから、まだ三日ぢや、それにモ一他人扱ひでは無うなつて居る。

ヴァオラ 御言葉の御様子では、貴殿は主君様の御機嫌の變り、易いのを御懸念致さるゝやうにも見えませんが、それとも小生の奉公振りが悪るので、ムりますか。一体主君さまは、什麼な御方で、ムりますか？ 薄情な御方で、ムりますか？

ヴァレン イヤ、決してナ。

ヴァオラ 御言葉で安堵致しました。——アレ、主君様のお出ましぢや。

公爵、侍臣、キエリオ、その他従者の面々登場

公 コラ、セサリオは居らぬか？

ヴァオラ 爰に控へまして、ムります。何にぞ御用で、ムりまするか。

と進み出てる。

公 餘のものは、暫時退去つて居れい。

ヴァオラの外は一同皆退出す。

さてセサリオ、汝もよう知る通り、余は胸の奥まで皆、汝に打ち明けて居る、一點の秘密とてもない。就ては、汝に一ツ姫の許まで、使者の役目を引受けて貰はにやならぬ。シテ、一旦使者として、赴く上は、門前拂ひをされて、空しく引き退るやうなことは、相成らぬ。玄關口に立ち塞がり、直接面會を遂ぐるまでは、足に根が生いたと言ふてやるのぢやぞ。御言葉では、ムりますれど、人の風評に申すと、ほり、若し、姫君が悲歎の涙に掻き暮れて居られます上は、とても御面調は、協はぬ儀かと存



じられます。

公 その時は叫喚くなり、何なり勝手次第ぢや、阿容々々と指を衝へて立ち戻るよりは、遠慮も會釋もすべて打ち棄て、了うて苦しうない。

ウイオ て、萬一姫上にも面謁が協ひましたと致しますれば？

公 知れたことぢや、その時は余の燃ゆる情思を打ち明けて呉れ、存分この赤心の程を辯じて呉れい。戀の取持役としては汝は誠に適役ぢや、物騒千萬な面魂の使者の口から出るより、汝の如き少年の口から出れば、その言葉は格別先方の耳に入り易い譯ぢや。

ウイオ いかゞなものでムリませうか。

公 いや確かにさうぢや、汝はまだ成熟らぬ無邪氣の若者、女神の朱唇とも見紛ふその唇の鮮かさ、喉を漏るゝ言葉は少女のそれの如く清

く涼しい。その他すべてが皆女形ぢや、たしかにこれは汝に切つて箱めた適役ぢや。——コラ／＼四五人に隨員を申しつけるぞ、望みとならば總員でも宜い。余は孤獨が何より好物ぢや——よいな、首尾克く依むぞ、これが協へば身どもの財産を汝に半ばつかはしても惜しうはない。

ウイオ 及ばす乍ら根限り相勤めまする。

餘は側を向きて獨照

でもこれは、身を切る刃、縁の仇、戀の媒介する方は、實は良人と冊いてあげたい方。

と退場



### 第五場 オリヴィア姫邸内の一と間

筋——この一場に現はれ来る新人物は第一、オリヴィア姫、第二、姫のお抱の茶坊主、第三、姫の家令マルヴァーリオ是也。オルシノ公爵の使者としてセサリオ(實はヴィオラ嬢)防れ来りて姫に面會を送げ、公爵の爲めに戀の媒介役を勤む。されど意外にも姫は却つてこのセサリオに思を寄せ、セサリオが立ち去る時、亦に托して指輪を贈りなどす。これにて男女の關係は大に複雑となりたり。オルシノ公爵はオリヴィア姫を愛し、又オリヴィア姫はセサリオのヴィオラ嬢を愛し、而してヴィオラ嬢はオルシノ公爵を愛す。一組も纏らざる所に幾多の波瀾曲折湧き来る。

腰元マリア及び茶坊主登場

マリア コレさ、今迄何所に居つたのか早く白状するがよい。白状せねば辯解はして上げぬわいな。恁麼な失策をした上は、卿の首は必然飛ん

て了ひます。事によると永の暇位で済むかも知れねど、それとて結局餓死になるから、首が飛ぶのと變はりはない。

茶 イヤ首が飛んだお蔭を以て、隙でなしの隙を貰はずに済めばどれ程幸運か知れぬ。又永のお暇が出たとて、冬とは違ひ、時節柄拙者大きに我慢が爲易いやうな譯。

マリア それなら卿はいよく決死の覺悟をきめたのかいな。

茶 イヤさうでもムらぬ。たゞ二條の覺悟を決めました。

マリア 什麼せ一と筋繩では行かないといふ謎かいナ。

茶 イヤ甘い、畏れ入りましたよ、その頓智の甘いには——オヤ、モ！御出掛けか、お静かに。

と口ひつ、やがて立ち去らんとするマリアの耳に目を寄せ、



時にマリアさん、若しトビ様が御酒をお禁止になつたら、あの方の奥方には、誰かさんのやうに、氣のきいた方に限りますとサ。

マリア 知らぬわいな、那麼ことをアレお姫様が出来ぢや、立派に今度の失策の申開きをするがよい。

とマリア退場

茶 後生一生智慧の神、是非とも爰で甘い駄洒落を授け玉へ、恵み玉へ、兎角伶俐のつもりで居る人も、試して見れば、莫迦者が尠くない。拙者のやうな薄白痴が却つて伶俐に通用するも知れぬ。キナペーラ大人も曰く「智慧の足らざる賢人よりも、智慧ある愚人を優れりとす、善い哉」。

オリヴィア姫、家令マルヴォーリオと共に登場

これはお姫様、御かはりもムリませず……

オリヴィア姫不興氣に、

オリウ 早うこの莫迦者をさがらしめい。

茶 コラ、何を愚圖々々致しある。早く姫上をさがらしめい。

と怒鳴る、莫迦者を姫に見立てたる也、

オリウ 何を言ひやる、汝の智慧は涸び切つて居る。モ、汝などに用事はないのみならず、段々詐をいふ癖がついてまゐつた様子ぢや。

茶 那麼ナ癖なら、只の水と説諭で矯正せまします。涸びた茶坊主なら水を飲ませます。するとその茶坊主に濕氣がつきます。又詐をいふ奴には修復を命じます。修復が出来れば、モ、不正直でなくなりませす。若し自分の手で修復が出来兼ねるとあらば靴屋に行つて依みます。無論何



品に限らず、修復を致せば貼布が當る道理、損じた善には惡の貼布が當り、直した惡には善の貼布が當るのは免れませぬ。此平易な三段論法が當座のお役に立てばそれよし、立たずば外に手段はムリませぬ。苦勞するのは身の藥、紅顔は花と共に移らう。只今姫上は莫迦者をさがらせよとのお言葉ぢや。依て念の爲めに今一應申しさかす、姫上をさがらしめり。

オリウ 何を言ひやるぞえ、汝をさがらしめいと申したのぢや。

茶 これは近頃沒義道なお仕打！ 諺にも冠冕きても猿は猿とムリにするが、その意義は、つまり拙者の如き茶坊主でも、茶壺のやうに中身まで茶が充ちて居る譯ではないといふ證據でムる。これより御免を蒙りまして、貴女様が莫迦者でムる所以を説明して御覽に入れませ

う。

オリウ 何でそのやうな事が。

茶 イヤ誠に易々諾々たるもので。

オリウ それなら試つて見るがよい。

茶 就きましては問答を致すのでムリですが、温なしく拙者の申すことを謹聽遊ばして、そして御返事をなされますやうに。

オリウ 折ふし他に遊戯もない故、汝の證明とやらをさいてつかはす。

茶 然らば姫上に御尋ね致す、日頃の御愁傷はそも何故の御愁傷でムりますナ。

オリウ お兄様のお薨去なされた爲ぢやわいな。

茶 然らばお兄様の魂魄は確かに地獄にあるものと推定致します。



オリッ つまらぬことを！お兄様は立派に天國にお在ぢやわいな。  
茶 お兄様が立派に天國に被居るものを、メソソ／＼歎く方こそつまら  
ない！さア／＼皆さん、早うこの莫迦者をさがらしめい。

オリッ 喃マルツォーリオ、卿はこの茶坊主を什麼思ひます、近頃手腕が上  
達して來はせまいか。

マルツ 御意にムりますナ、何れ生きて居て、虫の氣息が通ふて居ります  
間は手腕が上達致すものと存じます。満足な人間は年齢を取ると衰  
へますが、莫迦な人間は、益々莫迦が嵩じてまゐります。

茶坊主躍起となりて怒り出し

茶 ヤイ／＼お前さんこそ、さッさと年齢でも取つて大にヘタバルが  
善い、その間の抜け具合が餘ッ程嵩じて來るに相違ない、試しにトー

ピさんに聞いて御覽じろだ、憚ンながら俺をつかまへてコン／＼チ  
キの狐だとは言ふめいが、お前さんが問扱者でねいとは、恥度保證ッ  
ては呉れめいぜ。

オリッ マルツォーリオ卿の返答をききたいものじや。

マルツ これはしたり、伯爵家の姫君ともあらせらるゝ者が、かゝる無智  
の痴漢を御寵愛遊ばさるゝとはその意を得ませぬ、ツイ先達のこと、  
さる安物の茶坊主の爲めに散々油を絞られて居る所を、現に小生側  
で見物して居ました、御覽遊ばしませ、彼奴最早大分辯解に窮して居  
る様子、當方で笑つて見せて、何ぞ材料でも拵へて遣はさねば、一言も  
口のさける奴ではムりませぬ、先づ恁麼普通有り合はせの茶坊主の  
饒舌などに嬉れしがつて、キャツ／＼と致すものは、所詮茶坊主付き



の才藏位の人物でムります。

オリヅ アレ、マルヅォーリオ、卿は些と見識振る癖がある、そして兎角色眼鏡越しに物を見ます。すべて、鷹揚で邪思が無く、物に淡泊な人と申すものは、卿のやうに針程のことを棒程に騒ぎはしませぬ。茶坊主を渡世と致すものは、口に無駄ばかり申しても、肚裏に毒を有つては居ぬわいな、恰かも萬事に氣の届く者が、年中叱言のみ申しても、ソレで一言も無駄がないと同じことじや。

茶 さて、／＼姫君には、よくこそ我等茶坊主を御最負なされます、神妙に存じますぞ！

マリァ再登場

マリァ アノお姫様、只今一人の若者がお玄關にまゐりまして是非お面

調を致したいと申して居ります。

オリヅ オルシノ公爵よりのお使者ではあるまいか。

マリァ それは存じませぬが、大さう優雅な若者で、従者の衆も多勢にムります。

オリヅ 取次ぎには何人が出て居るのじや？

マリァ トーピ様でムります。

オリヅ それは飛んでもない、早う退去と申せ、狂人に應接が出来るものかいナ！

とマリァ退場

マルヅォーリオ、卿に行て貰ひます、若し公爵からのお使者なら、妾は所勞か、それとも不在と申すのぢや、その邊の所は、善きやうに取計らつ



てたもれ。

とマルウオーリオ退場

喃コレ、汝も見る通り、汝の洒落も次第に陳めかしく他人から嫌はれてまゐつたぞ。

茶 毎度何うも、吾々風情をば、我兒の如く御最負に預かりますが、イヤ御親戚筋にも脳味噌が些と不足な御方が……。おツとそのお方の御入來ぢや。

トービ登場

オリウ ありア確かに生酔の爲體ぢや。モシ門前に見えたのは何誰てムりますか？

トービ さ……士人で……

オリウ 士人！何のやうな士人でムりますか？

トービ その士人ぢやが……

と酒臭き吃逆をしながら

エー緋の鹽辛にアモー真……真平ぢや！什麼ぢやコレ茶坊主！

茶 コレ且那！トービ様！

オリウ コレ……什麼して卿は、早朝から銘酎など致して居るのぢや？

トービ メイライ……目出度ことも何ともありはしない。イヤ門の所には誰か居るだが……

オリウ あゝさうかいナ、什麼ナお方ぢや？

トービ お固からうが、軟かだらうが、那麼ナ事は構はない。此方はたゞ正直一方の人間……まア可さ何れにしても同一事ぢや。



と退場

オリウア 姫は少時呆れて見送る、やがて氣をかへて茶坊主に向ひ、

オリウ コレ、汝は酒に酔ふた者を何と見立てるのぢや？

茶 先づ土左衛門のやうで、痴人のやうで、又狂人のやうで、ムリます。一と口過せば痴人となり、二口過せば狂人となり、三口過せば水に溺れて土左衛門。

オリウ それなら早う検屍の役人の所へ參つて屍体の検査を依んで來るがよい。あれ程酩酊して居れば、確かに溺死の部ぢや、さア行つて介抱してやるがよいぞ。

茶 イヤ、姫君、あれ位ではまだ狂人の部でムリます。所で拙者のやうな痴人は狂人の番人位が相當でムる。 と退場

マルウガオリオ再登場

マルウ 姫君に申上げます、かの若者は是非面調を致す覺悟で參つたものと見受けられます。實は拙者は先づ御不快ぢやと申して謝りました。すると、その儀は兼ねて存じて居るから、それでわざ／＼參上致したとの返答、因て目下御睡眠中ぢやと申しますと、この儀も先刻承知の上、それを承知いたして居るから、それでわざ／＼お訪ね致したとの即答。これでは何と申して謝つてよいもので、ムリませうナ？ 何の手で謝つても、ビクとも致す摸様が見えませぬ。

オリウ 面會は協はぬと申してやるがよい。

マルウ 申した段ぢやムリませぬ。すると御門先きに立往生、脚に根が生える迄御待ち申して是非御面調を、と言ひます。



オリウ 全体何のやうな人體の者かいナ?

マルウ あれでも人間には相違ムりませぬ。

オリウ 何のやうな様子の人間ぢやと申すに。

マルウ イヤ極めて無作法な奴で……是非御目に懸りたいと申します  
がいかに遊ばします。

オリウ その人品又年齢は?

マルウ さればでムります、成人としては聊か若過ぎ、少年としては聊か  
老過ぎて居ります。野菜で申せば先づ莢豌豆、果物で申せば先づ流柿、  
つまり成人と少年との中途半端の奴にムりますナ。容貌の所は頗る  
ノツペリした好男子、又その舌端も黄色い聲でよくペラ／＼と廻り  
ます。什麼見ましても乳離れがしてまだ幾程も経たぬものとしか見

えませぬ。

オリウ 姫一寸考へて急に氣の變はれるこなし。

オリウ では會ひませう。腰元を呼んでたもれ。

マルウ マリアさんお召してムるぞ。

と退場

マリア再登場

ホルウ 而帕ぢやわいな。さアちよとそれを懸けてたもれ。今度限り公衛  
のお使者に逢ふてやる。

ヴィオラ嬢(セサリオ少年)及びその従者登場

ヴィオ 御當邸の御姫君は失禮乍ら何方でムりまする?

と覆面せるオリウ 姫を瞥見し乍らいふ、



オリッ 何なりとわが身に仰せらるゝがよい、取り次いであげます。シテ御用といふは？

ウイオ 兼ねてきゝ及ぶ傾國の美人、その一嘸一笑によりて……

と暗誦的にすらく、百ひ出せしが、人遊ひを畏るゝものゝ如く急に中止してマリッアに向ひ、

アノこの御方様が御當邸の姫君に渡らせられるか、拙者はまだ一度も御面謁を致したことがムりませぬ、折角骨を折つて暗誦してまゐつた名文句を徒らに、さもなき方に漏らすのは近頃不本意に存じます。

更にオリッウイア姫とマリッアとを當中に見乍ら

どなたも萬望御手柔かに願ひ度う存じます、至極氣の弱い小生の

ことゆゑ……

オリッ 貴下は何方からの御使者にムりまする？

ウイオ 小生は暗誦してまゐつたことの外は何も申上げられませぬ、シテ

只今の御尋ねは小生の役自以外の儀にムりまする。それよりは貴嬢さまが、果して御當邸の姫君なるか、御名告の程を願ひ度うムります、早速口上に取りかゝります程に。

オリッ 貴下はアノ俳優の類で？

と離弄的に言ふ

ウイオ これは中々お言葉のわるい……。尤もこれで小生は案外外見とは違つた人間でムりますので、と氣をよたせていふ



それはさうと、貴嬢様が全く御當主の姫君であらせられまするか？  
オリヅ 僭奪者でない上は、當主にムリまする。

ヴィオ アイヤ御當主に相違なくば、貴嬢は僭奪者でムリますぞ。すべて物は御自分のものぢやと申して、それを我手一個に擅に致すべき筈のものではムリませぬ。尤もこれは拙者の今日の使者の役目には關係なきこと、拙者は先づ貴嬢に贅辭を奉り、しかして後に肝腎な用向きに移ります所思で。

オリヅ 早うその肝腎な個所を伺ひませう。贅辭などは御無用にムリます。

ヴィオ これはなさけない言葉、折角骨を折つて覺えてまゐつた文句、しかも優美に出來て居りますのに。

オリヅ そのやうな文句に限つて皆そらくしにきまつたもの、是非差控へられたいものでムリます。實は貴下が門前に見えられ、色々慮外なことを申される由を承り、何のやうな御人體か伺ひたいばかりに、好奇にお呼び入れ申したまで、御口上などをきゝたらはムリませぬ。物に狂ふて居られるなら一時も早う御退去を願ひたく、若し又正氣となら簡短に願ひます。そんな浮ついた、仇いやらし口上などはさく耳は有ちませぬわいな。

マリア モシ、お歸りなされますなら、出口は此方で……。  
とマリア先きに立ちて促す。

ヴィオ 貴嬢がアノ出口さんで、これはお見外れ致しました。拙者は今少し爰に置いて貰ひます。



オリウア姫に向ひ、

拙者はこの巨大な方が畏くてなりませぬ。何とかして殺します。

とわざと小粒なマリシアに當てつけていふ、

オリウ シテ貴下の御思召といふは？

ウイオ 拙者はたゞ使命を傳へる丈の役目に過ぎませぬので、

オリウ 何ぞ餘程言ひ悪くい事があると見えます、その勿體のつけ方は何やら氣味のわるい……では、貴下の御使者の役目は？

ウイオ 吾人拂ひを願ひ度うムります。尤もかく申せばとて、別に宣戰の布告や降伏の催促を齎らした譯ではムりませぬ。大事は大事の役目乍ら、至極穩當な性質のものにムります。

オリウ 貴下の振舞は餘り穩當とも見受けませぬ、全體貴下の御身分、又

貴下の御用件は何でムります？

ウイオ イヤ拙者が無作法であつたとすれば、それはつまり相互様と申さねばなりませぬ。又拙者の身分、用件は、これは中々極内々の玉手箱、貴嬢の御手に入れば千金の重寶、他人の手に入れば天罰立どころに降る品。

オリウ 一同少時退去ませい。その玉手箱とやらを授かりませう。

とマリシアその他従者一同退場

では御口上の次第は？

ウイオ 世にも稀れなる名家の姫君……

オリウ これは又難有づくめの御口上、餘程念入りの品と見受けませぬ。一體その本文は何れから出ましたもので？



ウイオ 出所はオルシノ公爵の胸でムります。

オリウ 胸でムる！胸の何の邊でムりまするか？

ウイオ 無論胸の前部、書物に譬ふれば開卷の首章ともいふべき所、

オリウ それなら既に讀んで了ひました。あれは邪道を説いたものにムります。他に變つた御口上もムりませぬか。

ウイオ 急に話頭を一轉してツカメ事をおもふ、

ウイオ アノ一寸貴嬢の御顔を拜見致したう存じます。

オリウ 何ぞ妾の顔と相談せいと御注文でも受けてまゐられましたか、よもや御口上の本文には、そのやうな事はムりますまい。兎も角も帳を引いて申身を御覽に入れます。

と爰にて面帕を脱ぎて素顔をあらはす、



て品のり通のこうさ隠か何リウ  
しうせまりムて作造い善す一

さアよく御目をとめて御覽なされませ、何を隠さうこの通りの品で、一寸善い造作でムりませう。

といさゝか面映きを戯談に隠す、

ウイオ これが一切神の作工になつたとすれば、誠に無類の出来……

オリウ 繪具で塗つてあり



ますよ。尤も風や雨に剝げはしませぬ。

ウイオ イヤ誠に天成の麗頂色の配合、仕上げの見事さ、一點の非の打ち所とてムリませぬ。それにしても、折角かほどの美貌を授かりし甲斐もなく、後の世に標本を残さず、見すく墓場の土に埋もれ木と朽ちて了ふ思召なら、世に貴嬢など無情い方はムリませぬぞ。

オリウ 何のまアそのやうに無情いないことを致しますもので。死ぬ前にチャンと顔の目録を調製へます。そして一々個條書きにして遺言状に附箋を致しておきます。例へば一ツ薄紅色の唇二枚、一ツ睫毛附灰色の眼球二個、一ツ頸一本、顎二個、其外品々、ざつと恣意體裁てムリます。全體貴下は妾を誂める爲めの御使者でムリますか。

ウイオ イヤ貴嬢の御氣性は、これにて悉皆了解りました。貴嬢は氣位が高過

ぎます。されど心は鬼にせよ、御容貌は虫も殺さぬ美しさ、主君公爵は一と方ならぬ御執心にムリます。いかに絶無の美人なりとも、素知らぬ振は餘ンまりでムリますぞ。

オリウ 何れ位御執心で？

ウイオ こがる、情思溢る、涙戀を吐く呻吟、火焰をあざむく長太息。

オリウ でも公爵には、妾の胸奥を夙うに御存知の筈、妾はとて愛する事の出来ぬ身でムリます。げに公爵はお操行も堅固な方ではムリませう。又御人柄といひ御身分といひ、いかにも清き尊き若君には相違ムりますまい。世間の風評も至極宜しく、心寛宏に學識秀て、勇武の御氣象にも富ませられ、又生れついでに御標致も誠に御立派なものにムリます。それでも妾には什麼しても公爵を愛すること丈は出来ま



せぬこれはモ一夙に分りきつたこと、今更申上げるまでもムリませぬ。

ウイオ　でも、今假りに拙者が公爵であつて、あれほど痛ひ果敢ない戀に惱んで居るなら、それしきの愛想づかしなどは受けつけませぬ。どこまでも承知しませぬ。

オリウ　そんなら什麼遊ばす御思召て？

ウイオ　されば御門前に柳の枝の假庵を引き結び、生命とこがるゝ御名を呼び續けます。協はぬ戀の恨みの歌を作り、人の寢鎮まれる真夜中なりとも、憚らず歌ひ歌ひてオリウアの名を木魂に響かせます。拙者をあはれと思ふてくださる迄は、縦令天に翔り地にくゞりても、お逃がし申すことではムリませぬ。

オリウ　貴下なら、さうなすつても構へませぬ——全體貴下はいかなる家柄の御方ぞ？

ウイオ　現在の地位よりはすぐれた家柄——と申して現在の地位を低いとも思ひませぬ。元は由ある士でゐる。

オリウ　兎も角もこれにて御退去を願ひます。妾は公爵を愛することは出来ませぬ。この後ともお使者の儀は一切御無用にムリますが、事によると貴下のみは——

と貴下の一冊に力を入れ

今一度御光來になつて、公爵の御様子を御知らせなされてはくださらぬか。色々御苦勞でムりました。萬望これをお小遣に。

と若干の金子を興へんとす



ワイオ アイヤ拙者は賃取りの飛脚家ではムリませぬ故、その御心付けは平に御無用報酬を望むは却つて主君の公儀、拙者ではムリませぬ。あゝ貴嬢に、片戀の苦しみといふものを一と度味はせてあげたいものぢや、無情の君、さらばこれにてお告別。

と退場

オリサ 「貴下はいかなる家柄の御方で？」「現在の地位よりはすぐれた家柄——と申して現在の地位を低いとも思ひませぬ。元は山ある士でムる」——

と横りかへし乍ら深く考へる

確かにその通りに相違あるまい。物の言ひぶり、身の執成、顔といひ、氣性といひ、何に一ツとしてその證據でないものは、はない。

としみづく述べしが、忍らハッとせるこなし

アレ妾としたことが、小姓風情に、餘りといへば、はしたない。でも油断ならぬは心の曲者、たゞ一と目見たばかりに、ツイ、フラ／＼と迷ひ出す……。と言ふて今更これが什麼なるものぞえ、モシ、マルツォーリオは居やらぬかいナ。

マルツォーリオ再登場

マルツ 御召でムりましたか。

オリサ アノ一寸只今の強情な公儀の使者を追ひかけて貰ひます。不用といふのを、無理にこの指輪を置いて行つたわいな。このやうな品を受取る義理はないと申して返してやるのぢや、そしてこの後とも、公儀に未練などの残らぬやう、きツぱりと断るやうに言ひ含めてたも



れ。妾は到底公爵の妻とはなられぬ身若し明日あの若者が尋ねて参らば、詳しくその理由をさかせてやります。さう早う行つて貰ひます。  
 マルツ 委細かしてまゐりましてムります。

と退場

オリウ われとわが氣心が知れぬとはこの事よ、危ぶむ心を側から鎮める眼の媒介、あれこれ皆運ぢや。われとわが儘にはならぬこの身體、天命ならば致し方もない、たゞその成り行きに任せるまでぢや。

と退場

## 第二幕

### 第一場 イリ、ア國の海岸

筋 ヲイオリ嬢の兄セバスタアン、船長アントーニオの爲めに救はれてイリ、アの海岸にのぼる、セバスタアンは船長に向ひて、ウイオリ嬢の容貌が自分に酷似せることなどを語り、之を溺死せるものと思ひて痛惜すやがて船長と袂を分ちホルシノ公の館に向ふ、船長アントーニオ友愛の餘りその後を追ふ、

船長アントーニオ及びセバスタアン兩人登場

アント では、いよく御出立てムりますか、そして什麼あつても拙者の御隨行を御許しなされませぬので？



チセ  
アハス 後生してこのまゝ棄て置いて貰ひたい。自分は不運な月日の下に生れた身の上事によると、卿まで不運の連累をさせまいものでもない。それ故萬望拙者の不幸は拙者丈に任せて置いて貰ひます。折角の厚意に對して、いさゝかも迷惑を懸けては相濟まぬ。

アント でも行先地丈は御知らせなされませ。

セバ イヤ行先と申して、たゞふら／＼と足のまに／＼、別にこれと申す目途もなき目下の境遇ぢやよ。さればと言ふて、いかにも淡泊な卿の素振、人の隠しておく事を根掘り葉掘り聴き出さうなどの趣は味塵もないゆゑ、義理にも拙者の身元素性を名告らねば相濟まぬ心地がする。就きてはアントーニオぬし、拙者の本名をセバスタアンと記憶えて戴きたい、ロデリゴと申したのは、あれはホンノ假の名卿が知れ

るメサリンの町のセバスタアンこそ即ち拙者の實父なのぢや、拙者の同胞と申すは、妹のツイオラ只一人、妹とは言へ實は兩人とも同じ時刻に生れし双生兒ぢや。それ故死ぬるにも、是非同時刻にと願ふて居たものを、卿に救助られたばかりに、わが身一人が生存へることになりました。卿が荒磯から拙者を救ひあげくれし一刻以前に、ツイオラは溺れ死んで了ふてぢや。

アント まア何といふ間の悪るい日て……

セバ そしてアントーニオどの、瓜二ツと言はれた此拙者の口から、さう申すは異なるものぢやが、ツイオラは世間から美人と歌はれて居ましたのぢや。イヤ恁麼ナ事は餘り當にもならぬが、たゞその氣質の優婉な事は拙者の口から公言して憚らぬ。いかなる嫉視者もこれのみは認



めずには居られなんだあゝこの一人の骨肉は摠の海に溺れ死し、後に取り残された小生が盪辛い不覺の涙をふり濺ぐ。察してください、アントーニオどの。

アント それとも知らずで碌な御款待も致しませず、何とも申譯がムリませぬ。

セバ イヤわが身こそ種々厄介をかけて済まなかつた。

アント モシ、

とアントーニオは此時キツとなりて

拙者に苦勞死をさせまいと思召すなら、以後は萬望下郎代りに使つて戴きたらうります。

セバ イヤ、貴殿が若しこれまでの好意を無にせまい——折角救ふ



シルオは先く行ち落の者拙ハセ  
嫌機御ヤイ。やち館御の公ノ  
シラよ

てくれし拙者の生命を、又奪るまいと思ふなら、是非その儀は無用にしてもらひたい。これで早速袂を分つとしませう。モ、胸が一杯に張りつめて、指でも觸れば眼から時雨が催しかねぬ有様ぢや、拙者の落ち行く先きはオルシノ公の御館ぢや、イヤ御機嫌よう。

と退場

アント それなら御無事に行つてお出でなされませ。生憎なことには、自分にはオルシノの公の御家來とは仇敵の仲、さもなければ、早速後から



お慕ひ申す所なのぢやが……イヤ待つた、縦令何のやうな憂目に出逢ふとも、あの大事なセバスチアン様、今更自分の危険などを考へて居られるものか。おうさうぢや、追ひかけやう。

と退場

### 第二場 街頭

筋——オリヴァア姫邸の附近。家令マルウオーリオ、ヴィオラ(セサリオ)嬢に追及してオリヴァア姫より贈れる指輪を渡す。これにてヴィオラ嬢は初めて自分がオリヴァア姫より懸想せらるゝを知る。

ヴィオラ嬢(セサリオ)及び家令マルウオーリオ追ひ附きたる體にて登場

マルウオーリオ コレ、貴下は只今オリヴァア姫のお邸に参られたものではム

らぬか。

ヴィオラ その通りてござる。拙者はあれから急ぎ加減で、やつと爰まで参つた所ぢや。

マルウオーリオ例の指輪を取り出して、

マルウオーリオ それでは姫君の仰せによりて、この指輪を御返却致しますぞ。一體貴下が御自分でお持ち歸りになれば、何にも拙者が慙慙面倒を見るに及ばなかつたのぢやに。それから一ツ、公爵に面會されたら、婚禮の談判は、以後一切御謝絶ぢやと、委細判然と傳へて戴きたい。それからモ一ツ用事がムる。別事でもない、以後はこの事に關係して、貴下が當邸に出入致さぬことぢや。但し公爵の御様子を注進の爲めなら苦しくないといふことぢや。ソラ上げますぞ。



と指輪を放り出す。

ヴィオラは少時歩へて後、早くもオリヴィアの意中を察せるこなし、

ヴィオラ ても姫君にはこの指輪を一旦お納めになりましたのでムります。

今更取り戻す譯にはまゐりませぬ。

マルツ コレ／＼ 貴下は先刻痼癥まぎれに此指輪を姫君に投げつけた

と申す。それ故同様に、投げ返してまゐれとの姫君の御申附、若し拾ふて行く丈の價值があると思ふなら、ソラ其所に轉ばつて居ますぞ。又それにも及ばぬ程のものと思ふなら、見つけた奴に拾はせるまでぢや。

と退場

ヴィオラ 自分は指輪を置いて來はせぬに、これは什麼した譯であらう。よも

や、この服裝が、姫の御眼についたのではあるまいが、さういへばホンに姫はしげ／＼とこの身に見惚れ、それに心を奪はれて、言葉の條理も、しどろもどろ、とり留めのなきことまで口走つてぢや。こりや確然この身に戀慕シテ只今の使者なども什麼やら戀の曲者が工夫させた仕業に相違ない。公爵よりの指輪などは受取らぬ！ほ、公爵は指輪を贈つた覚えはない。當の敵は確かにこの身ぢや。若しさうなら、お氣の毒、夢にこがれるがまだ益ぢや。それにしても畏ろしいものはこの變裝、悪人どもの邪惡をするも皆この手段、眉目優れたる佞人の手にかゝれば、いかなる女子も只心のすゝが、脆きが常の身としてはこれも又致方はあるまい。それはさうと一伍一什の結末は、什麼着けやう。主君には深くオリヴィア姫に御執心、又不届なこの自己は主君に



對して心中立シテ又姫はラツかりとわが身を捕へて横懸幕後の始末が思ひやられる。小姓の服装をして居る上は主君の愛を得るには、こまなく不便さりとて本體が婦女なら——あゝ何といふ間の悪るい！オリヅィア姫には濟まぬ苦勞を懸けるといふものぢやイヤ何事も昔時節ぢや時節を待つより外に致方はない。このかよわき腕で、何のこの葛藤が解けやうぞ。

と退場

### 第三場 オリヅィア姫邸の一と間

筋——夜半酒宴の場、サー・トール・ビベルチ、其酒友サー・アンドリュウ・エーグチーク及び茶坊主の三人にて大に飲み且つ歌ふ。家令マルヴェオー

リオ來りて、姫の命と稱して大に一同を叱責す。マルヴェオー立ち去るに及び、腰元のマリア復讐の爲め一策を案じ、姫の偽書を作りて之をマルヴェオーに贈り、姫がマルヴェオーに戀慕せるものゝ如く見せかけ大に彼を弄殺せんとす。

サー・トール・ビベルチ及びサー・アンドリュウ・エーグチーク登場

トールビ サアアンドリュウ氏此方へ——眞夜中過ぎに起きて居るのは、ツマリこれ夙起ぢや御承知の通り、古い諺にも「夙起の家には福来る」。イヤ拙者は那麼諺は御承知ではないのであります。尤も拙者の考では夜更かしは、ツマリ夜を更かす事であると思ひますので……トールビ 違ひます、尊公は一を知つて未だ二を知らない。夜半過ぎに起きて居り、それから臥床に入るのはこれ早きなりぢや。して見れば夜半



を過ぎて臥床に入るは、ツマリ早寝する譯になる。一體全體、人體といふものは四種の元素より成立するではムらぬか。

アンド そのやうに承りますナ。尤も拙者の考では、人間は寧ろ食へることゝ飲むことゝで成り立つやうに見えるのであります。

と眞面目にいふ、

トービ イヤ尊公はどうも學者でムるナ。では御説に従ひ、大に飲み大に食ひませう。オイ、腰元の君、酒ぢや、

茶坊主登場

アンド オヤ、茶坊主の莫迦が來ましたナ。

茶 これは、御揃ひさま！これで莫迦が三人揃ひました。

トービ 兎に角よく來た歌でもやらかさう。

アンド イヤ全くこの茶坊主は好い咽喉を有つて居ます。その脚つき、歌ひ振りときては全く以て慄ひつきたい程であります。殊に又昨夜のビグログロミタスのお話などは、何とも言はれぬ面白味がムつた時に拙者は貴公の情婦から御依頼の銀貨を三枚届けておいたが、慥かに貴公の手に入つたぢやらうナ。

茶 イヤ恩賜の品は確かに懐中、マルツォーリオの鼻は八方睨み、情婦の手の色白羽二重、ママドンスは居酒屋では御座なく候。

と山鏡目を喋る、アンドリョー大に感歎の體、

アンド 甘い、これ程の甘い洒落は近頃滅多にきいたことがない。

さア今度は歌が所望ぢや。

トービ さア、歌へば酒賃をつかはすぞ。歌ふてきかせい。



アンド 拙者からも酒賃をつかはすぞ。苟くも一人の侍が……  
 茶 イヤ、やりませよ。歌は艶ッぽいものにしますか、それとも極淫いものて……

トービ ソノ艶ッぽいのに限るく。

アンド さうぢやく、眞面目なものは肩が凝る。

茶 「歌よ」

何所にどうして居やるか様よ、  
 惚れたわたしがこゑはりあげて、  
 歌ひますぞへ心のたけを。  
 戻つてたもれモ一こゝへらて、  
 わかるゝ帯の又めぐりあふ、

わたしと様は深い戀ひ中。

アンド こりア實に滅法甘いものぢや。

トービ 結構々々。

茶 「歌よ」

戀のさかりはたゞときの間よ、  
 うれしい時は笑はにアならぬ、  
 前途の事言へア鬼奴が笑ふ。  
 善はいそげといふだけ野暮よ、  
 もゆる唇吸はせて早く、  
 衰へやすき人の身の上。

アンド これは實に感心すべき美音でありますナ。



と大に氣取る、

トービ いかにも傳染的鼻音で……

と冷かす、

アンド 御言葉の通り全く奇麗で、そして傳染的でナ、

と分つた顔つきにて様子かへす、

トービ イヤ鼻から歌を吸ひ込むと、その傳染の具合がいかにも香ばしいものぢやさうでナ。時にこの際一ツ大に酔ふて蒼空のデン／＼めぐりをさせるは何だものぢや、さうして大に歌つて歌ひ抜いて、鼻を鼻から追ひ出し機織女に魂を三遍位宿がへさせて呉れやうかい  
かゞてゐるナ？

アンド 是非／＼さう致したいものであります。これで拙者は歌が中々

上手であるのであります。

茶 それでは大に唸りませう、犬の遠吠といふ所を……

アンド 犬の遠吠は甘い文句ぢや、所で歌の文句は「コン畜生盡しと決めませう。」

茶 ぢア「黙つて謀れコン畜生！」など、やらかすのでムリますナ。しますると畏れ多くも貴下様を捉まへて、畜生呼ば／＼りをせねばならぬことに立ち到りますが、

アンド ナニ從來畜生呼ば／＼りをされつけて居るから苦しうはない。アお主早速始めるがよい首起の文句が「黙つて謀れ」で、

茶 黙つて居ては旦那、謀れません、

アンド 甘い／＼その洒落は——兎に角始めるがよい、



とこれより三人順番に歌ふ、

腰元マリア登場

マリア　まア騒々しい！まるでさかりのついた猫のやうではありませぬか、只今お姫様が家令のマルツォリオさんをお召びなすつて、貴下方を退治するやう、お申しつけになられましたから、その覺悟でお出でなさるがよい。

トビー　へんお姫様が何ぢや、吾々様には相手不足ぢや、マルツォリオとさては、よくくのオタン珍、とうくたらしく、たらりあがりらゝりとうの仲間ぢや。

と歌かゝりにていふ、

一體全體俺様はこの家の御親類ぢやらう、血族の關係を有する御方

ぢやらう、筈、奴ツ！お姫様がきいて呆れらア。

〔歌と〕 所バピロン男がムる——姫よ、姫よツか。

茶　イヤ何うもトビー様の洒落とさては、われく、黒人が畏れ入つて了ひます。

アンド　氣が向いてる時は全く上手におやりなされる。拙者なども矢張りさうでムる。調子はトビー様には協はないが、拙者の方が癖はないてありますナ。

トビー　〔有らん限りの大聲にて歌ふ〕「時は師走の十二日……」

マリア　これサ拜みます、静かにして居てくださいませいな！

家令マルツォリオ登場

マルツ　コラ！貴殿方は氣でも狂はれたか、それともいかゞ致された



のぢや。この深更に及びて下郎人足の如くガヤつくとは、餘りといへば、無理無體無作法の沙汰ではムらぬか。よもや御館を居酒屋と心得ても、些と遠慮と申すものがあるものぢや。

ト一ビ 遠路の所御苦勞様とてもぬかすがい、さっさと引ッ込め！

マルウ イヤ、ト一ビ氏、拙者は貴殿に對して申し聽かす儀がムる。姫君には縁戚の片割と見做して貴殿を客分扱ひこそすれ、その無作法には日頃つく／＼御困却なされて居らるゝのぢや。今後若しふつりと此不謹慎を取り止めになるなら、従前通り御出入を差許しも致さうが、萬一改心の御模様が見えぬに於ては、最早貴殿の隨意にのみ放任致す儀には相成りませぬぞ。

ト一ビ これには少しも頓着せぬこなし、

ト一ビ 「歌ふ」さらば少娘さん私アいとまよ

と俗歌の文句をばマリアに替て、歌ひ乍らしなだれかゝる、

マリア アレお廢しなされませ……

ト一ビ 「歌ふ」力なく／＼眼に涙

と醉眼朦朧たる體、

マルウ 餘りといへばこの爲體！

ト一ビ 「歌ふ」それでも私ア死にませぬ

とよるめきて倒れる、

茶 ト一ビさま、其所に休まッしやい、

マルウ サテ／＼この態は實に見あげたものぢや。



と苦々しくいふ、

ト一ビ 「歌よ」こんな野郎は追ひかへさうか

とマルサオーリオに當てしいふ、

茶 「歌よ」かへしア什麼するお前は後で？」

ト一ビ 「歌よ」こんな野郎はさッさとかへさう

茶 「歌よ」歌目くくく、それア出来ぬ」

ト一ビ オイくこの調子外れが！莫迦を申すナ、

と茶坊主を叱りてマルサオーリオに向ひ、

一體貴公は多寡が家令の身分ではないか。自分がイヤに聖人氣取りで済まして居るので、それで天下に酒も菓子も無用と思ふて居るのか。

茶 イヤ御尤も、全く以てその通りでゐる。それから辛い薬味の類も食はにアなりませぬ。

ト一ビ さうぢやとも！コレ、マルサオーリオ、貴公などは餘計なことを言つて居る隙に爪の垢でも煎じて飲むがい。オイ、マリア、酒を呉れよ。

マルサ マリアさん脚が若し、折角姫君の御氣に入つて、無事に奉公しやうと思ふなら、この上、酒などを持つて来て、やることはなりませぬぞ。拙者は屹度姫君に申上げるからその積りて居るがよい。

と退場

マリア さッさと行つて長い耳でも振り廻して居るが善い。

と後影を見送り乍ら言ふ、長い耳とはマルサオーリオを驢馬に擬したるなり、







トービ エッ清教徒ぢやから、横つといふので？それは什麼いふ理窟があるのでムるナ？

アンド これぞと申して格別深い理窟はないのでありまするが、しかし相當の理窟はムります。

マリアはアンドロニーに頼着せずマルツォーリオの事を語る。

マリア それで居りましたして、心底から清教徒の信者といふ譯でもなく、何をやつても永續は致しませぬ。先づ日和見の贖造物、乙にツンと濟まし込んで、上品振つた言葉を勿體らしう謀り、自分ほど偉いものはないと高くとまり、智仁勇兼備の御自分様をたつた一と目見れば、何人でも直に惚れて了ふものと、相場をきめて居るから驚いて了ひます。妾はこの弱點につけ込んで、一ツ立派に仇打ちをして見るつもりでム

ります。

トービ してその仕組は？

マリア 謎づくしの艶書を拾はせてやるのでムります。それには髭の色や、脚の恰好、容體、眼光、額つき、顔の色といろく井べ立て、什麼しても一と目見て自分の事としか見えぬやうにしておきます。幸ひ妾はお姫様の手蹟を真似るのが上手、古い手紙にでもなりますと、何方が書いたのか判別がつかぬ位であります。

トービ イヤ、素的！大概俺はその趣向を嗅ぎつけたぞ。

アンド 私の鼻にも感じて來ました。

トービ マルツォーリオの奴、その落し艶書を見ると、的切當家の姪御から來たものと思ひ込み、大に色男を氣取るといふ寸法だネ。



マリア 先づその邊の見當てムります。

アンド 善い見當ぢや、必然標的に命中ります。

マリア 當り前で……

アンド これア必然面白いに相違ない。

マリア 細工は粒々仕上げを御覽じませ。妾の處方の藥は必らずよく效ます。貴下方御兩人と、それから茶坊主さんとは、是非艶書拾ひの場に出張して、その見張りをして貰ひます。什麼マルツォーリオが解釋をつけるか、よく御目を留められませう。先づ今晚の所は一と先づこれにて御就寢、夢なりと御覽なされませ。先へ失禮。

と退場

トーピ イヤおやすみ。

と見送り乍らいふ。

アンド 何と見上げた女子ではムりませぬか。

トーピ 全く以て機轉のさいいたチンコロ阿魔、そしてぞッこん俺様に惚れ切つて居る、珍らしくもねえス！

と大氣取り、

アンド 拙者も先年一度女子から惚れられた例がない譯ではムりませんが……

と眞面目くさりていふ。

トーピ イヤ兎に角寢床に入りませう。時に尊公、軍用金の取寄せ方を願ひますぞ。

アンド でも貴下の姪御様が色よき返事をしてくれなければ、椽の下の



力持ちになるのでありますナ。

トービ 兎に角軍用金ぢや。若しそれで最後にツンと言はなかつたら、拙者を頓馬とでも何とでも言はれるがい。

アンド 言ひます、必然言ひます、貴下が怒らうが怒るまいが。

トービ オイ〜尊公、モー一杯さこしめすとしませう。寝るには些と遅過ぎる、此方ぢや〜。

と退場

### 第四場 公爵の館の一と間

筋 重にオルシノ公爵とヴィオラ嬢、小姓セサリオとの間の對話、公爵の人物とヴィオラが之に對する情思とを描く、公爵は總て再びヴィオラをオリヴィア嬢の許に遣はす。

オルシノ公爵、ヴィオラ嬢、キニリオとその他登場

公 余は歌が所望ぢやぞ。

樂手數名入り来る。

あゝ何れも早かつた。シテ、セサリオ卿も知れる例の歌、昨夜も聴かされた夫の古めかしい一節ぢやが、あれを聴くと妙にこの胸の苦惱が治癒り、忙しい目々、苦しい現代の端唄や、作り文句には見られぬ味がある。一節で宜しい、聴くとせう。

キニリ 生憎なことには、あの歌の唱歌者が只今爰に見えて居りませぬが、公 誰ぢやツたか、嗚、あれは？

キニリ あどけ者のフェスト、即ちオリヴィア嬢の亡父君が、日頃御最負になされた茶坊主でムります。何所ぞ其所へらに居るでムりませうが。



公 呼んでまゐれ、その間音楽だけでも聴くとせうぞ。

とキョリオ退場、音楽

ウイオラニ向ひ、

さア些と近う寄れ、何れ卿とてもゆくは、楽しい戀の苦勞をする身であらうが、その時は必らず余の事を忘れまいぞ、眞正の戀人といふものは、何れも余と同様、心の駒の絶えず動きて、偏にその戀ひ焦がるゝ少女のこのみ、思ひつめて居るものなのぢや、什麼ぢや、卿はこの音楽を何と聴くぞ？

ウイオ 胸のみだれにつれて鳴るかに覺えまする。

公 なか／＼隅へはあけぬことを申す、奴ぢや、年齢こそ取らね、確かに戀ひしい女の一人や二人は見初めたことがあるに相違あるまい、什

麼ぢや／＼。

ウイオ はア、お蔭様で些少ばかり……

公 シテその婦人といふは？

ウイオ アノ丁度殿様に生寫してムりまする。

公 ホホ、それでは卿には些と不釣合ぢや、年齢は何歳ぢや？

ウイオ 矢張り、殿さま位の年頃にムりまする。

公 ヤレ／＼、太う老過ぎて居る喃全體婦女と申すものは、必らず自己より年長の良人を選ぶべきものぢや、その方がいかにも落着がよく、愛の秤に謬差が出ないものなのぢや、口では何と意張つて見ても、秋の空なる何とやら、女子に比すれば、移ろひ易く、晴れると見れば、忽ち又降り出して、年中濡れ通しの水臭いのが、われ／＼男子の常態では



ある。

ウイオ 小臣もそれに相違ないと存じて居ります。

公 それなら戀人は自己より若いものに致せ、さもない日には、とても永續は覺束ないぞ。女子の身は例へば一朶の薔薇花、一垣薔が開くと共に、忽ち色も香も失せるものぢや。

ウイオ ホンに殿さまの仰せられます通り情ないのは女子の身の上實が入る時がそれが亡びる時でムります。

キリヲ、茶坊主と共に登場

公 コレ、坊主、早速昨夕の歌をきかせい。セサリオ、卿もよく耳にとめるが善いぞ。頗る古風な、多愛のない歌で、日向ぼつこの紡績女や、角の絲絡繰る田舎少女が歌ひふるして居るものぢや。真率な人情を語

茶 り、罪のない戀にあくがれる所に、太古の面影を留めて居る。

茶 さて始めまして宜しうムりまするか。

公 あゝ早うきかせて貰はう。

と音楽始まる

茶 [歌と] 死なう、よ、いざさらば、

柩ア椏の木くもれる色よ。

さらばさらばこの浮世、

添へぬ戀ならたと死ぬばかり。

白の經帷子その上を、

飾るは水松、

籠る實意の深いのぢや、



誰にも負けぬ。

むくろの上は黒づくし、

花はいらぬぞ艶ある花は、

親しい友もわが墓に、

やよ尋ね来て泣くことなかれ。

腸を断つ歎息は、

吐かぬが薬、

人の通はぬ山奥に、

われは埋もれむ。

公  
イヤ御苦勞々々。

と若干の金子を興ふ

茶 格別苦勞も致しませぬ小生は歌を歌ひますのが愉快にムりますので。

公 それならその愉快の報酬ぢや。

茶 これは誠に御名言、愉快の擧句には、早晚その報酬が附属物でムります。

公 序でに余はこれにて退出の許可を汝に興へ遣はす。

茶 オヤ〜お天氣模様がおモト御變はり、これでは所中雨具の用意をせねばならぬ、先づ殿様のやうな移り氣の多いお方は船にても乗つて、いづくともなく青海原に乗り出されるが一番でムりますナ。仕事に變り、目途が變り、グラリ〜ユラリ〜、用事のない身にはこれに



越したことはない何れア御告別

と退場

公 その他も一同退出つて苦しうない。

とキュリオオその他一同退場

さてセサリオ、モ一度卿に、かの情知らずの石姫の許に、罷り越して貰ひたい。そして余の愛は尋常の愛とは事かはり、有てる采邑の多寡などには目もくれぬと傳へるのぢや、又富貴に伴ふ地位名聲、それ等も物の數には入れぬ。たゞ自然の妙手が鑿めたる瑠璃の眼、珊瑚の唇ゆゑに、日頃かく浮身をやつすのぢやと申して呉れよ。

ウイオ それに致しましても、若し先方にて、什麼しても殿様を愛することが出来ぬとあらば……

公 そのやうな返答ではこの胸が承知せぬぞ。

ウイオ 御尤もな仰せてはムりますれど致方がムりますまい。假りに今爰に一人の婦人が居ると致します。そしてその婦人が、あたかも殿様がオリヅア姫を御慕ひなさるが如く殿様をお慕ひ申して居るものと致します。でも殿様におかれまして、什麼しても右の婦人を愛することが出来ず、さっぱり御断りになつたと致します。婦人の方では黙つて退去るより外に致方がムりますまい。

公 アイヤ淺慕な婦女子の胸が、何で余の胸に燃ゆるが如き熱情の迸出に耐へ得るものぞ、何でこの千萬無量の苦惱を藏み得るものぞ。婦人の胸には我慢が無い、辛抱の力が缺けて居る。駄目ぢや、婦女子の戀はたゞ咽喉元三寸、口腹の慾、忽ちにして満足、忽ちにして食傷、忽



ちにして嘔吐ぢや。之に反して余の戀は飽まで足れりとせず、飽まで多きを患へざること漫々たる大海も物かはかりそめに余に對する姉女子の愛と、オリツアに對する余の愛との比較などは無用なるぞ。

ウイオ　でも私の考にては……

公　卿の考にては何ぢや？

ウイオ　女子ぢやとて、戀にかけて決して男子に劣らぬものと思ふのでムります。赤心の深さは何れに優劣はムりませぬ。現に私の妹などは、深く一人の男子に愛を傾けました。若し私が萬一女子の身で、殿様を御慕ひ申すとせば、かくもあらうかと思はれました程で……

公　卿の妹とナ、いかなる閱歷ぢや。

ウイオ　皆無てムります。妹は胸の情思を人にも告げず、

と結末の方を悲しげに述べてホッと溜息を漏らし、

例へば蟲に食まるゝ雷の如く、苦勞にやつるゝ花の類、いつもたゞくよ／＼と耽るは獨り物思ひ、情乎とせるその姿は、石に刻める女神像、唇邊には笑ふて肚裏には泣いてばかり居りました。これが戀でなうて何てムりませう。われ／＼男子は口數多く、契約のみは立派に致せ、中身はそれほどムりませぬ。男子の戀は兎角見かけ倒しが多いのでムります。

公　でも、卿の妹は戀ゆゑに死んだと申すか。

ウイオ　はい、私は現在兄弟もなく姉妹もない、一人法師の身の上でムります。

といひしが、兄の事を思ひ出し獨語のやうに



でも果してさうかしらぬ——。

急に思ひつきたるこなしにて

殿様、これからオリヴィア姫の許に参るのでムリまするか。

公 おゝ悉皆その事を忘れて居つた。急いでまゐれ。シテこの寶石を姫に手渡し、余の戀は一步も退くことをゆるさぬ。拒絶には服せぬと傳へるのぢやぞ。

と兩人退場

### 第五場 オリヴィア姫邸の園内

筋 家令マルヴァーリオを愚弄せんとの目的もて、態と落としおきたるマリアの偽せ書が、詭向きにマルヴァーリオの掌裡に入り、向人は姫より愛慕せられ居るものと大に己惚るゝに至る。

トービ、アンドロニー、及び茶坊主フアビアン登場

トービ いざ此方へ、フアビアン大人。

フアビ お随伴せんで什麼しませう。若し今度の一件を少許でも見落した日にア、死んでも残念がつき纏ひます。

トービ 什麼ぢやあ主は、夫の碌でなしの山狗に赤耻をかゝせるのを嬉れしいと思ふか。

フアビ 嬉れしくしないで什麼しませう。御承知の通り、例の熊相模の一件で拙者は彼奴の爲めに御主人様の御機嫌を酷く損ねましたやうな次第……。

トービ 彼奴を立腹らせる爲め、モ一度熊相模をやらかし、そして眼の玉が白黒する程翳つてやらうぢやないか。いかゞでムるナ、アンドロニー



ぬし？

アンド 一生懸命それに取り懸りませう。

侍女 マリア登場

トイビ イヨー御大將の御出馬、待つて居ました。シテ例の首尾は？

マリア さア御三人とも早く黄楊樹の蔭に隠れていただきます。マルツォ  
ーリオが、モー追つてこの路を参ります。今迄彼所の日向で、ものゝ三  
十分間許も、自分の影法師を見乍ら種々身振り仕草のち稽古をして  
居ました。萬望皆様、よく御目をとめて御覧じませ。この手紙一本の力  
で、早速思案の外の莫迦者が一人出来ます。後生でムんす、皆さんビツタ  
リ密接いて隠れて居て貰ひますよ。

三人爰にて黄楊樹の蔭に入る、

お前は爰に轉がつてお出で！

と一通の手紙を地上に投げ出す、

さアこれで大きな鱈を一疋釣り上げるのぢや。

と退場

マルツォーリオ登場

マルツォ イヤ運ぢや、何事も皆運ぢやテ。マリアの言葉によると、姫君には  
このマルツォーリオに思召がムるさうで……現に又姫君御自分の口  
から、若し男子に迷ふなら、卿のやうな人物に迷ふなど、被仰られた  
事もあつたのみならず、他のお附きの何人よりも、平生この拙者をば  
特別鄭重に取持つてくださる。こリア什麼しても、只事ではなささう  
ぢや。



と大得意の體、樹蔭の三人何れも思々しがる、

ト一ビ 此奴ア驚いた、イヤに己惚て居やがる！

フアビ 先づ静かに〜！色々考へ過ぎて先生とら〜七面鳥の雄見たやうになりましたナ、いかゞてムる、羽翼を擧げて意張つて歩くアノ風態と言ッたら、

アソド 畜生、只はおかないぞ、撲りつけてやるぞ。

ト一ビ コレ静かに〜！

マルウ ウフ、いよ〜拙者も伯爵マルウオーリオと呼ばれるのか。

ト一ビ エー畜生奴！

アソド ビストルぢや〜。

ト一ビ コレ静かに〜！

マルウ 尤も恁麼ナ先例が無い譯でもない。ストラッチー夫人などもその御家來と結婚なされた。

アソド ウス、お多福！

フアビ これさ、お静かに！モ一先生餘程深入りしてムる。什麼てムります、アノ膨れかへつて意張つて居る風態は、

マルウ 結婚の大禮も濟みて早や三ヶ月、拙者は正面の御座に泰然として控える――

ト一ビ エーあの野郎の眼のクリ玉を、強弩で射貫いてやりたい！

マルウ シテ身邊に近侍の輩を呼び寄せる、身には天鵝絨の衣裳を纏ふ、――オリヅアが今しも假睡の折ゆゑ、拙者はしばらく表に出御遊ばしたので……



ト一ビ 野郎！硫黄の煙で燻し殺してくれぞ。

フアビ 先づ御静かに〜！

マルツ さてそれより存分に鷹揚な態度を取ること宜しくあり、デロリとばかり、近侍の輩を見渡したる後にて一場の訓示を致す。ツマリ主君は主君家來は家來、よく心得違ひのなきやうにせいとの主旨、さて一族のト一ビを召べと命ずる——

ト一ビ 奴牢屋に叩き込むぞ！

フアビ コレも静かに〜！〜！さア〜。

マルツ 鶴の一と聲に七人の近侍がバラ〜と立つてト一ビを召びに行く。拙者はその間不興の面持先づ時計の螺旋でもまくか、但しは又——何ぞ立派な指輪でも弄るかして居る。やがてト一ビが見参す

る。そしてその邊で叩頭再拜——

といる〜手眞似身振りをする、

ト一ビ 覺えて居やアがれ野郎、生かして置かねえぞ。

と木隆にて業を叩かす、

フアビ 御立腹は御尤、決して御無理とは申しませぬが、まア〜暫らく御辛抱なされまし。

マルツ 乃で拙者はこのやうな鹽梅に手をさし延べて握手をしてつかはす、尤も笑顔などは味塵も見せず、威儀儼然として睥めつける——

ト一ビ 筥棒奴！その時は横面を撲りのめさずにおくものか。

マルツ それから拙者は嚴かに、やよ従弟、余は縁ありて今回卿の姪と借老の契を結ぶこと、相成れる上は、一族の長として一言戒告を與へ



にやならぬ」

トービ 何……何んぢや？

マルサ 「以後はよく／＼氣をつけて暴飲を慎まんければならぬぞ。」

トービ このカッタヒ奴、不屈千萬な！

フアビ これさ、御辛抱なされませ。さもないと折角の計略も水の泡と消えて了ひます。

マルサ 「のみならず、日頃卿は貴重な歳月を空に過し、日頃交るものは、人もあらうにアノ莫迦侍」

アンド あれは拙者のことを指すのぢや、確かにそれに相違ない。

マルサ 「サーアンドリユーとやら申す奴」

アンド 多分さうであらうと察して居ました、何人も拙者のことは莫迦

と申さぬものはないのであります。

この時マルサオーリオ落してある手紙に氣がつく、

マルサ ハテ世話の焼ける物が落ちて居ることぢやナ。

と大に勿體ぶる、

フアビ さアメた、阿呆鳥が係蹄に近寄つたぞ。

トービ オイ、靜かにせい！願くば彼奴に手紙の文句を聲高々と讀み上げさせてやりたいものぢや！

マルサオーリオ終に手紙を手に取りあぐ、

マルサ オヤ／＼／＼これは確かに姫の御手蹟ぢや！このCの字、Uの字、それからTの字、又この大きなPの字、確かにそれに相違ない。これが姫の御自筆でなくて什麼なるものかい。



アンド Uの字、Vの字、Tの字、——ハテ全體何故でありませうナ。

と略字の意味を察し得ぬこなし、右の略字は To the Unknown beloved, this, and my good wishes, with Care Present. を意味す、譯せば「君様まゐる、心づきの御存じよりなり、當時にありては難書などに尤も普通の文句と見えたり、

マルヴェーリオは右の意味を察して點頭くこなし、

マルヴェ 「君様まゐる御存じより」——姫君の御用ひなされさうな文句ぢや、どれア眞平御免を蒙りまして封押し切つて拜見致しますかナ。オッとお手柔かに——此封印はと見ると矢張り日用の御品、いよ——姫君に相違ないが、全體この手紙は何人に宛てたものかしらぬ。

フアビ これア立派に思ふ壺に陥つたぞ。

マルヴェ (朗讀すること)



い……すらし神戀のはらり ヴルマ



わらはの戀神しらす。

その人は？

いふてたもるな唇よ。

徒には言はれぬ。

「徒には言はれぬ」——次ぎの文句は何とあるな？ヤ調子がまるで違ふて居る。徒には言はれぬ」——若しそれがマルツォーリオの事であつたら什麼せう。

トービ くたばりやがれ、この畜類奴！

マルツ 「朗讀すること」

言ふてしまへばすぐとげられる戀。

されど言はねば胸一杯に。

血は流れねど張り割く痛み、

あゝ懐かしいM、O、A、I。

フアビ こりアやくたいもない謎やぢ！

トービ イヤ彼女おんなの才氣には畏れ入る！

マルツ 「あゝ懐かしいM、O、A、I」か——が、それより此方こつちの文句が肝腎ぢ

やドレ——！

フアビ イア飛んでもない毒を盛つたものぢや！

トービ そしてこの馬糞うまふん鷹たかは、イヤに面白く食いつくぢやないか。

マルツ 「言ふてしまへばすぐ遂げられる戀」——左様、姫君から言へばその通りぢや、拙者は奉公人、姫君は御主人ぢや、これしきの事はいかなる凡人にも分り切つたこと、少しも難解の個所はない。それからこの



結末ぢやが——この單語の并べ方は一體何を表示するものかな？  
何所か自分の姓名に聯絡が取れれば大願成就ぢやが——緩くり一  
遍讀んで見やう、M、O、A、I……

トイビ さアそれをこじつけるのだ、奴さん嗅覺が少々きかなくなつて  
來たナ。

フアビ イヤこの野良犬でも今に嗅ぎつけて吠え出します。随分酷い臭氣  
がしますからナ。

マルウ M——マルツォーリオ、このMといふ字は、拙者の名前の首字  
ぢやナ。

フアビ ソラ御覽なされませ、とう／＼嗅ぎつけましたてせう。この山犬は、  
これで中々嗅覺がきいて居ます。

マルウ Mの字はいゝが、後のつゞきが什麼も妙でない。よう查べると穴  
が明く、Aが來るべき筈であり乍ら、Oになつて居る。

フアビ 何れ最後には「オー」と呻る位が落だ。

トイビ 左様若し呻らなければ、太い丸太で一ツどやしつけて、「オー」と言  
はせてやるサ。

マルウ その後にはIの字が來て居るナ。

フアビ 俺等は貴公の後に來て見物して居る。

マルウ M、A、I、O、——什麼もこの謎は前の謎のやに解し易うない。尤も  
些しばかり字の順序を振くつて考へると、矢張り拙者の事になつて  
は來る。四字とも皆拙者の名前の中に含まれて居る字ぢや。——待て  
／＼後の方に續いて文句が書いてある。



〔朗讀すること〕「若しこの艶書卿の御手に入り玉は、篤と思案し玉へや。妾は卿より見れば高麗の花なるぞ。されど地位高しとて憚るには及ばじ。或る人は富貴の家に生れ、或る人は勳功を以て富貴を獲、又或る人は無理に富貴の地位に祀りあげらる。今運の神は御手を擲けて卿を迎ふ。遠慮なくそれに従り玉へや。つきては、やがて登るべき富貴の地位を辱かしめざらんが爲めに、従來の卑屈なる態度は打ち棄て、別人と生れかはり候へ。縁戚の某に對ひては成るべく反抗ひ玉へ。奴婢一同に對ひては、思ひ切つて氣六ヶ敷かるべし。口には堂々として天下國家の經綸を説き、行儀作法は須らく不自然突飛なれ。こは卿をいととしと慕ふ婦人の忠言に侍るぞ。いづぞや卿に向ひて黄色の靴襪を穿けとすゝめ、又十文字の襪紐を結ばんことを望める人を想

ひ出て玉へ、是非想ひ出て玉へ、いづく卿若し青雲の志あらば、萬事その心の儘なり。若し又そを欲せずとならば、永く卿を家令の地位に留めおきて、奴婢の群に入れ、とても運の神の指頭にも觸れん資格はなきものと見做さん。穴賢。

仕へさす身に仕へて見たしと思ふ、運のよき不幸者より、イヤ、これは明々白々、白晝燭をともして物をさぐるが如しぢや。一點の疑ふべき個所もない。心得ました、今よりは尊大に構へ、天下國家の書を繙きませう。ト、ト、トの奴をやりこめ、朋輩の奉公人どもを足元にも寄せつけず、一から十迄御注文に外れぬ人間となつて見せます。最早餘計な心配などをして、莫迦は見まい。什麼考へても、姫君がこのマルヴェーリオを愛して居てくださるのは明白ぢや。先日姫君は、拙者に



黄色の靴襪を穿けと勸められ、又十文字の襪紐を結びつけて居たのを褒めなされた。シナ早速この事を引用して、それとなく御名告りなされ、そして殆んど命令的の句調で、日頃御好みの通り致せと仰せられる。かくも身に餘る幸運は何と感謝してよからうか。よし、以後は不自然突飛、傍若無人、黄色の靴襪に十文字の襪紐、即刻即時に改正ぢや、御空の神、幸運の神、誠に難有うムります。——まだ爰に追白があるナ。

「朗讀すること」『卿はこの艶書の主を祭せぬことはあらず、卿若し妾を憎からず思ひ玉は、その心根を笑顔に見せてたべ、卿の笑顔はこよなう卿に似合ひ侍る。それゆゑ妾の面前に居らるゝ時は、絶えず笑ふて見せ玉へ、やよなつかしの君。』

あゝ難有うムります。笑ふて御目にかけますとも、御注文とあらば、何事でも致さいて付麼なりませう。

と退場

フアビ これは無類飛切り面白盡しの見物役、什麼ナ大金を呉れられても、この役ばかりは人に譲られませんナ。  
トイビ それにしても之を頭腦から編み出した奴は、女房にでもしてやりたい位ぢや。

アンド 拙者とても御同様に思ふのであります。

トイビ 別に持參金などは望まぬが、たゞモ一、一通這麼ナ滑稽を見せて貰ひたい。

アンド 拙者も矢張りその通りで。



フアビ オツとその御本尊が見えました。

マリア再登場

トイビ マリア、什麼も卿の智慧には俺も兜を脱いたぞ。

アンド 拙者も矢張りその通りであります。

トイビ 俺はこの身體をボンと抛げ出して卿の奴隷になつても可い。

アンド さう言へばホンに、拙者も御同様で……

トイビ 所で卿はマンマと彼奴を騙し了せたが、一坦夢が覺めた日にア

屹度、彼奴はキ印にでもなつて了うぜ。

マリア それはさうと、首尾はいかゞでムりましたか。

トイビ 猫に鯉節といふ具合ぢやツた。

マリア 今迄の所はホンの序幕、まだ御退屈でなければマルヴォーリオが

お姫様の面前に出る所を是非御覧なされませう。屹度黄色の靴襪を穿けて出てまゐりませうが、あれはお姫様が何よりお嫌ひの色でムりますよ。十文字の襪紐も御同様にお嫌ひの品、それから又ニヤ／＼笑つて見せませうが、それも随分目下のお姫様の御機嫌には向きませぬ。彼麼なにお儲ぎの折ゆゑ、御立腹の程は大概知れて居ます。お思召がムりますなら、萬望これから妾と御一所に、

トイビ オツと地獄まで、お随伴しますよ。

アンド 拙者も御同様に致します。

と一同退場



### 第三幕

#### 第一場 オリヴィア姫の園内

筋 小姓セサリオ(實はヴィオラ嬢)公爵の命によりて再び來訪し、茶坊主の取次を以てオリヴィア姫に面會す、その間にオリヴィア姫はセサリオを捕へて口説くことあり、セサリオ之に應ぜず、

ヴィオラ嬢(小姓セサリオの姿及び小鼓を携へたる茶坊主登場)

ヴィオラ 毎々元氣がようて結構ぢや、全体卿は小鼓に由りて暮らして居るので、ムるナ?

茶 イヤ、拙者は寺院に倚つて暮らして居りますので。

ヴィオラ それならアノ坊様で?

茶 飛んでもない事を被仰ります、拙者は寺院の側に暮らして居りますまで、ツマリ拙者の住む家が寺院に倚つて居るので、ムる。

ヴィオラ その筆法で言へば、宮殿の近傍に乞食が居れば、王様が乞食に由りて生活を立て、卿の小鼓が寺院の附近に据へてあれば、寺院がその小鼓に由つて立つて行くと言はれる譯ぢや。

茶 これは御名前で、イヤ、什麼も近頃の世の中は中々油断が出来ませぬ、惻愍な御方にかゝつては、言葉はまるで羊の皮の手袋見たやう、すぐに裏返しがさします。

と兩人互に口頭の争ひをなすこと少時、

ヴィオラ 時に姫君には御在宅でムるか?

茶 ハイ、御在宅でムります。早速御取次ぎを致しませう。但し貴所



さまの御身分、又は御用の筋等は、それは拙者の畠違ひ、平たく言へば  
領分違ひでムる。

と退場

ウイオ イヤ立派に茶坊主の役は勤まるほどの才覚はある男ぢや、この役  
目を無難に勤め了せるには一種の智慧がなうてはならぬ、よく相手  
の機嫌氣襪や人品やら、又時と場合とを見量らひて、一寸の油断もさ  
れるものでない、それゆゑ氣骨の折れることは中々眞面目な仕事に  
劣りはせぬ、すべて巧者な無駄口は棄て難きものなれど、賢ぶりたる  
人の下拙な洒落ほど下品なものはない。

サー・トローピ、及びサー・アンドリュー登場

トローピ これはようこそ。

とウイオラに挨拶す。

ウイオ これは申しおくれました。

アンド 御健勝の段祝着に存じます。

ウイオ 申し遅れて恐縮に存じます。以後萬望御別戀に。

アンド それは拙者よりも御願ひ申す所であります。

トローピ 萬望此方へ御入來を願ひます。何ぞ拙者の姪に御用がムるなら、  
早速御面會致すてムりませう。

ウイオ それなら仰に従ひまして、ずつとまかり通りませう。イヤ姫君の方  
から御出ましてムります。

オリウイア姫及びマリヤ登場

姫君にはいつにかはらぬ御麗はしさ、御頭の邊に後光がさす思が致



します。

アンド オヤ／＼此若者は餘程宮仕へに馴れたものと見える。御頭の邊に後光とは甘いものぢや。

と感服する。

ヴィオ シテ姫君に申上げまるすが、私の今日の使命は極内密の用事、折入つて姫君御一人の御耳にのみ達したうムります。

アンド フム、後光に「使命に極内密——よし／＼よく暗誦して置いて、いざといふ場合に早速使ふことに致さう。

オリッ 確と庭園の木戸を鎖めてたもれ、御用の趣はこの身一人が承るほどに。

と、これにてトロービ、アンドリーニ及びマリア退場

ようこそ。

と握手を求め、ヴィオヲ手をさしのべら、

ヴィオ いつも御無禮のみ申上げて、恐縮に存じます。

オリッ モシ御名前を伺ひます。

ヴィオ セサリオと呼ぶ微賤の者。

オリッ 微賤の者とナ？ モシ左様の卑下を禮儀と心得る世の中は末てムりまずぞ。貴所はたゞオルシノ公爵の家來ぢやと申すまで。

ヴィオ オルシノ公爵の家來は従つて貴嬢の家來、公爵は貴嬢の戀の奴てはムりませぬか。

オリッ でもこの身は公爵を何とも思ふては居ませぬわいな、若し公爵が妾の事を忘れくださらば辱く思ひますので……



ウイオ 姫君私は公爵の爲めに、わざ／＼參上致しましたので。  
オリウ 又してもその事ばかり、公爵の事は腰氣にも出してはくださる  
なと兼ね／＼御願ひ申したてはムリませぬか。尤も貴所の御口から  
人事ならぬ別の事を御口説きになつてくだるなら、妾は鶯の初音に  
もまして珍重しまする。

と暗に意中をほのめかす。

ウイオ アレ姫君――

オリウ 萬望妾に言ふ丈言はせていただきます。先日御目にかゝりて、ッ  
イいとしさの身にしむまゝ、妾は一個の指輪をもたせて、御後を慕は  
せました。誠にあれは自己を傷け、家來を傷け、畏らくは又貴所をも傷  
けし仕業、露御見識りもなき品物を、女の身の猿智慧に、強いて押しつ

けやうといたせしは何うまア御蔑視でムリませうぞ。妾の身はさな  
がら烈にのれる小魚さぞや御胸の利刃に截りさいなまれしこと、  
心苦しう存じて居ります。これ丈申上げますれば、御察しのよい貴所  
の胸に御分りにならぬ事はない筈。最早薄紙一重の隔てとてもムリ  
ますまい。それゆゑ萬望アノ御返事をさかせて載きたうムリますわ  
いな。

ウイオ 拙者は貴嬢が御氣の毒に存じまする。

とウイオラはいかにも餘儀なげにいふ。

オリウ 氣の毒の次ぎはやがて戀……

ウイオ とても／＼さうはまゐりませぬ。仇敵をも氣の毒とは思ふことが  
出來ます。



ナリサ それほどまで無情い事を言はるゝなら、最うふツつりと愚痴がましい事は申しませぬ。それにつけても、うとましきは、この浮世、微賤のものゝ、何にとて斯くは心騒るぞ！末遂に他人の餌となる身なら、數にも入らぬ豺狼の爪牙にかゝらんよりは、見事に獅子の手にかゝりて亡せう。

この時、時辰儀鳴る、

アレ時辰儀まで、かく仇に時刻を費すのを叱ると覺える。——イヤコレ若人、別に配慮するに及ばぬ、最早卿を良人としてかしづきはせぬ。——とは言へ、卿がやがて年齢も加はり、器量備はる日ともならば、たしかに連れ添ふ妻に、六十年の不作を歎かせる人とも覺えぬ。——出口は此方ぢや、ザツと西へ……



御を妾使は卿ノア、れあち待サ一レアウリオ  
しけまりムてひ思

ウイオ そんなら告別致します。

末永う御息災にお暮らしなされませ。何にぞ主人公爵に御傳言はムりませぬか。

ナリサ アレ一寸待ちあれ、ア卿は什麼妾を御思ひてムります？

ウイオ 飛んだ心得違ひをなされて居るものと思ふて居ります。

と暗に女子の自分を男子と誤認せるを諷す、ナリサは之を別の意に解す、



オリウ 妾が若し自己自分のの身分をとり違ちがひて居るなら、卿とても矢張りさうぢやと思ひます。

ウイオラが只の小姓風情にあらざるべきをいふ、

ウイオラ さう御思ひなら差支がムりませぬ。拙者わがは外見みかけとはまるて違ひます。

と更に自分の女子なることを諷す、

オリウ いづれにせよ、妾が望む通りの人であつてくださればよけれど

...

とウイオラの無情を怨む、ウイオラ又之を別意に解す、

ウイオラ 貴嬢が御注文の通りになれば、幾分か人品があがるでムりませうか。些ちしさうなりたひものでムります。今の所ではホンの貴嬢の弄玩もも

物御笑草...

と少しくツントする、今迄自負心の爲めに蔽はれ居たるオリウイアの熱情は一時に勃發す、

オリウ ア、いかなる輕蔑けいべつも卿の唇くちびるより漏るゝを見れば、たゞ美しと見るばかりぢや。巧に隠すとすれば、穂に出づる、戀はげに曲物まがものか、戀の秘密は他人ひとから見れば、眞晝の光ぢや。モシ、セサリオぬし、春の花乙女はなをよめの操、ありとあらゆる世のものにかけて誓ひますが、妾は卿を愛します。物の道理も分別も、モ、こればかりは、壓おさへ切れませぬ。何にも妾から申出た戀路ぢやからとて、それを拒絶すべき理窟はなき筈、求めし戀より求めずに得らるる戀は、尙更よおほしめいと思召おぼしめして、萬望よろこ妾の願をば協たすひさせてくださらぬか。



ヴィオ それなら包まず隠さず明白に申上げますが、日頃私は只一と筋に心の赤誠をさしげて居る者がムります。それも決して女子の爲めではなく、又いかなる女子にもこればかりは言はれぬ秘密、それゆゑ姫上、これにて永の御訣別を申上げます。モ一二度と再び公爵の泣き言を口説きにはまゐりませぬ。

オリサ さう言はれず又お出でなされませ。今はつれないこの胸も、いつかはやさしみの出ぬとも限りませぬ。

と退場

### 第二場 オリヴィア姫邸内の一問

筋——前場にてオリヴィア姫とヴィオラとの會見の様を目撃せるアン

ドリユーは嫉妬心を起す、悪戯好きのトビーは嫌ねてアンドリュートの臆病なるを知るが故に、面白半分にヴィオラと決闘せよと勸む

サー・トビー、サー・アンドリュート及びフアビアン登場

アンド イヤ全く拙者は最早一刻も這處ナ所には居ないのであります。

トビー 何故でムるナ、モシ、その理由を伺ひませう。

フアビ アンドリユー様、是非その理由を被仰つて戴きたいもので。

アンド 實はオリヴィア姫が、拙者よりも彼の公爵家の小姓にいろ／＼御世辭を振り撒いて居るからであります。拙者はそれをチャンと庭で見物して居りました。

トビー シテ、その際姫は尊公の姿を見て居ましたか、いかゞでムる？

アンド 見て居た段ぢやムりませぬ。



フアビ それがソノ、姫君が貴所様に惚れて居る何よりの證據でムります  
テ、

アンド これはしたり、卿は拙者を愚弄物に致す所存で……

フアビ さう被仰るなら、拙者がこれよりその譯を、道理責め理窟責めに致  
して説明して御覽に入れませう。

トービ それこそ何より確かなものぢや。

フアビ 一體姫君が貴所のお目の前で、彼の二才どのにお世辭を振りまか  
れたのは、ツマリ貴所の腹の虫を怒らせ、貴所の寢惚けて居る勇氣を  
喚びさまし、貴所の胸に火を投げこみ、貴所の肝臓に硫黄を撒き散ら  
す苦肉の計略でムる。さう仕向ければ、いかに貴所でも姫君に飛びか  
ゝつて散々口説いた擧句の果は、何にか耳新らしい擧句でも吐きな

がら、あの二才どのを閉口させて、ギョーの音も出せなくするに相違な  
い——と、これがソノ姫君の御注文でムツたに相違ない所が、それが  
悉皆グレハマとなつて了つた。貴所は折角の好機會を知らず、顔指を  
くはへて引込んでムツた。これでは貴所などは、モ一姫君から氷點以  
下の北極扱ひ、和蘭人の鞆の氷結然とブラさがるより外に致方はム  
るまい。若し一坦癡ツた男を取り戻さうと思へば、腕力か、智慧袋か、何  
方かて名譽恢復をせにア駄目でムる。

アンド 若し什麼にかせねばならぬといふなら、腕力の方でまゐらう。拙  
者は權謀は不得手でありませう。策士と言はれる位なら、穢多非人の方  
がまだ結構ぢや。

トービ さういふ譯なら、是非勇氣の土臺に尊公の運を築き上げて見玉



へぢや。是非彼の青二才に喧嘩を買つて大にキメつけ、重軽傷の左様都合十一個所もつけて見玉へぢや。さすれば必然姪どの、目にもとまる筈、拙者が掌大の印版を捺して保證致す。世界第一の媒介者を連れて來ても、勇氣の語で取りもつより、姉女子の心を動かし得る筈はないに極つて居る。

フアビ アンドロニー様、これより外には、別に妙計もムりませぬ。

アンド 然らば、御兩人の中で、決闘狀を先方に届けて戴きたいもので。

トイビ オツと承知、成るべく武張つた、いかつい字體で書かッしやい、文句も成るべく短かい慳貪なものに限りませぬ、尊公御得意の洒落は、耕て置る程入れてあつてもよいが、何よりも流暢で奇抜なのが、肝腎ぢや。そしてインキの續く限り、悪口をつき、先づさッと三遍位野郎呼ば

りをしてやるがよい、それから大版の紙に書ける限りは、嘘でも法螺でも、八餅無性に并べるので、ムるナ。さア御早く、インキの黒さよりも腹の中は、尙更眞黒くして取り懸るべしぢや。さア。

アンド その間貴所方は何所に待つて居てくだされますナ?

トイビ 當方から御居間にお訪ね致しませう。さア御早く。

とアンドロニー退場

フアビ トイビ様、誠に貴所様のよい玩弄物、中々お安くない次第でありますナ。

トイビ 全く廉價くもないかも知れんよ。約二千磅位は、彼奴の懷中を絞り上げてやつたからナ。

フアビ 時に先生の書いて持參致すといふ手紙は、餘程奇妙なもので、ムリ



ませうナ。尤も貴所様はよもや先方の手にその手紙を御渡しなさる御所存では……

トービ 渡さいて什麼なるものか。否でも應でも先方の青二才に其返答をさせてやるのだ。尤も乃公の考では、あの兩人はとてつ決闘などをする柄ぢやない。若しアンドリューの體を解剖して見て、彼奴の肝臓に蚤の脚に粘りつく程の血の氣があつたら、乃公はその屍骸を食つてお目にかける。

フアンビ 對手の小僧さんとても、格別悍猛な面貌はして居りませんナ。

マリア登場

トービ オイ、乃公の好きな雛兒がチョコ／＼やつて來た。

と小柄なマリアの事を戯れていふ。

マリア モシ、腹の皮を振らせて見たいと思召めすなら、早く此方へ御出てなされませぬか。彼の鼻下長さんが、亞弗利加人に化けましたよ。性根の据はつた歐羅人には、とても彼麼ナ莫迦らしい、愚にもつかぬことが本氣に出來ますものか。モ、黄色の靴襪を穿いて居るぢやありませんか。

トービ 襪紐も十文字に結んで居るのぢやナ？

マリア エ、その様子ツたらありません。まるで寺子屋の御師匠さんといふ風でムります。妾は仇敵のやうに、後を附け狙つて見てやりました。落した手紙に書いてある通り、一から十まで守つて居るから呆れます。イヤにニヤ／＼と顔中皺だらけにして笑ふ所などは、何所をさがしても決して又と見られる圖ではムりませぬ。妾は石でも打ち



つけてやり度い位でムりました。必然お嬢様から一ツや二ツはビシヤ  
リと撲たれますよ、横面を尤も當人の方では、撲たれもすれば、餘程難  
有い所思か何かで、一層ニヤ／＼して見せるかも知れませぬ。

トービ オイ早く／＼早く連れて行つて呉れ！

と一同退場

### 第三場 街頭

筋 ヴィオラ嬢の兄セバスタアン、快氣ある船長アントーニオと共  
に市内に入り来る、やがてアントーニオは己が財藏をセバスタア  
ンに渡して自由に使用せよと百ひおき乍ら旅宿を捜すべく立ち  
去り、セバスタアン獨り市内を彷徨す(双生兒のことなれば男装せ  
るヴィオラ嬢がセバスタアンに酷似せるはいふまでもなく、此兩人

が同一市内に闘らず居住することゝなりたれば、後段に於て幾多  
の葛藤を胚胎し来るは豫め察すべし)

セバスタアン及び船長アントーニオ登場

セバスタアン 私は什麼しても卿に迷惑を懸ける氣はせぬが、それでも是非世  
話を焼いて呉れるといふなら、何とも言はず、卿の言ふ儘になつて居  
やう。

アントーニオ イヤ拙者は貴下をたゞ一人手放して、見て居る氣にはとてもな  
れませぬ。是非お隨行をと思ひ立つては、矢も楯も耐らばこそ、そのま  
ゝ飛び出してお後に附いて參つたのでムります。尤も、これはたゞ貴  
下のお顔が見たいといふのみではムりませぬ——イヤ見たいこと  
は見たい、何所までともお隨行する氣では居りますが、モ—一ツの譯



は、何にしろ不慣れの土地の一人旅、若しもの災難が御身の上に振りかゝりてもしては一大事といふ懸念があつたからの事でムります。元來この邊は知邊所縁のない他國人には、やゝともすると随分無法な難題をも言ひ兼ねぬ土地柄でムります。つまる所お懐かしさに取越苦勞が手傳つて、それでお後を慕つて参りましたやうな譯で……

セバ アントーニオどの、現在の拙者には何んと御禮の致し様もない、只「辱ないの一言で濟まして置かねばなりません、兎角折角の厚意親切にもこのさまり文句が流行がちで困るのぢやが、拙者は胸の中では決して御恩を忘れはしませんぞ。世が世なら、何とか御禮の致し様もあつたものを。

急に氣をかへて、

さて、これから如何致したものでぢや。土地の古蹟なりと見物致さうか。

アント それに明日の仕事、先づ何より旅宿にお出でなされませ。

セバ イヤ拙者は別に疲勞も致さぬ、そして暮れるにはまだ間がある。什麼ぢや、これから當市の自慢の紀念碑やら名所舊蹟を見物にまゐらうてはないか。

アント 拙者は御免を蒙りたうムります。此市を歩けば、少々危険い譯がムりますので、實はある時當公爵の兵船を相手どり、水軍を致した時拙者は一ツばしの働きをやりましたので、それが大變な評判になつて居ります。若しこの土地で捕りもしやうものなら、先づ申開きの立つ見込はムりませぬ。

セバ それでは餘程公爵の部下を害傷めたものと見えますナ。



アント ナニ左程酷いこともしませんでムりました。随分酷い目に會はせてやつてもよい道理が當方にあつたのでムりましたのぢやが……その後いろく交渉の上、敵から奪ひ取つた品物をそっくり返せばそれで落着といふ運びに立ち到り、大概の市では貿易の利益を考へて皆その通りに致しましたが、たゞ拙者丈は頭を横に振り通しました。それ故若し今日爰でラツかり捕縛れもしやうものなら、中々容易いことでは濟みませぬ。

セバ さういふ譯なら餘り外出をせぬがよい。

アント 何より外出は拙者に取りて禁物でムります——イヤ一寸お待ちなされませ、この財布をお渡し致します。旅宿は南の市外れ、エレファント亭に取りさめます。拙者が食事の指圖を致しておくほどに、貴下

はその間に市内見物をなされて、保養がてら御見聞を擴められるが宜しうムります。お濟みの上は右の旅宿にお光來なされませ。

セバ それにしても此財布は？

アント イヤナニ御眼にとまつて買つて見たいと思召す小間物でもムりませう。失禮乍ら御手元は、下らぬ買物をなさるほどの餘裕もムりますまいと存じまして。

セバ では預つておきますよ。一時経てば、

アント 「エレファント亭へ、

セバ オツと承知ぢや。

と兩人退場



### 第四場 オリヴィア姫邸の園内

筋——オリヴィア姫、家令マルヴォーリオを召す、侍女マリアあらかじめ  
 彼が様子の少しく異常なるを告ぐ、やがて出頭せるマルヴォーリオ  
 を見れば奇妙の服装をなし、恰かも姫の戀人然と振舞ひて大に姫  
 を驚かす、されば、姫はマルヴォーリオを眞に發狂せるものと思惟し、  
 その監督をトビーに托す、トビー得たり賢しと之を捕へて暗室に  
 檻禁す、

やがてアンドリューとヴィオラとの決闘談に移る、双方とも決闘など  
 は薄氣味悪るけれど、トビーとフアビンとの兩人、側より頻りに救唆  
 す、いよく、抜劍せんとする間際に船長アントーニオ入り來り、ヴィ  
 オラ嬢を見て之をセバスタアンと誤認し、ヴィオラに代りてアンド  
 リューと闘はんとす、されどアントーニオはオルシノ公爵の吏員の

爲めに捕縛せらる、その際前場にてセバスタアンに預けおきた  
 る例の財布をヴィオラ嬢に渡せと迫ることなどあり、双方容貌の酷  
 似より種々の誤解起る。

オリヴィア姫及び侍女マリア登場

オリヴィア **〔旁白〕** 使者を以て呼ばせはしたれど、さていよくその人が見え  
 たなら何としませう。いかにもてなし、いかなる贈物を致さばよきも  
 のやら、若き人は費ふよりも借りるよりも、買ふものぢやとやら——  
 ハテ妾としたことが、ツイ聲が高過ぎた。

と不圖心づきたる體にて侍女マリアに向ひ、

マルヴォーリオは何所に居やるかいナ？ アノ眞面目な沈んだ様子が  
 現在のこの身には詭向き、何所にマルヴォーリオは居やるかいナ？



マリヤ 只今此方へ見える所でムリますでもその様子が何やら變て、必然狐か何ぞに魅かれて居るのでムリます。

とほけて言ふ、

オリヴ マア！什麼したといふのかいな？何ぞとり留めのない事でも口走るのがかいナ？

マリヤ いゝえそのやうな事は些しもムリませぬ。たゞニヤ／＼笑ふてばかり居ります。爰へ見えましてら御要心遊ばすが宜しうムリます、たしかに氣が狂れて居りますから。

オリヴ 兎も角も呼んで來るがよい。

とマリヤ退場

先方が氣が狂れてなら、この身もさうぢやたゞ一方は沈んで居り、他

方は浮いて居るとの差違があるばかり。

マリヤ、家令のマルツォーリオと共に再登場

これマルツォーリオ卿はいかゞ致したのぢや。

マルツォーリオ エへ、お姫様。

と薄氣味悪く笑ふ、

オリヴ 何を笑ひます？——妾は悲しい譯があつて卿を召んだのぢやわいな。

マルツ 悲しい譯でムリますか？

と聊か呆氣に取られし面持、急に思ひ直して、

イヤ、ナニ悲しいのがお宜しいなら悲しくもなれます。全体この機紐を十文字に結へつけるのは、餘程血液の循環を妨げまするやうに覺





中は腹どれすまり居てし致に色黄は脚[ウルマ] じゆせまりムはて深い黒々

えます。が、ナニこれしきの事は敢て辭せずでムります。之を御覽になつてお歡びになられる御方がムりますれば、歌の文句にもある通り、何より本望にムるわいな。

オリヴ コレ、卿は什麼して居やる？ 何を申すのぢや。

マルヴ 脚は黄色に致して居りますれど、腹は中々黒い譯ではムりませぬ例の一件は儘

かに掌てに入りました。何で御言葉に背そむいてなりませう。お優しい御手蹟は日頃チャンと見覺えて居りまするでナ。

と落したる靴のこゝをほのめかす、

オリヴ マルヴォーリオ卿は早う床こゝに入つて休息やすみむがよからう。

マルヴ 床に入るのでムりまする！ エーモ！ 入りますとも！ 戀ひしいお方と一所なら……

と一層クニヤクしながら矢鱈に自分の手に接吻する。

オリヴ これはしたり何故卿はさうニヤク笑ひ、そしてのべつに手を管めるのぢや？

マリヤ コレ、マルヴォーリオ様貴下あなたは全体什麼どつなすつたのでムンす？

マルヴ 卿などに返事を致せと申すか——イヤ鴨が騒げば杜鵑もツイ



歌ふとやら、苦しうない、聴いてつかはす。

マリア 何故貴下はお姫様の御前をも憚らず、變ナ、鐵面皮しい風をなさるのです？

マルツ 「地位高しとて憚るには及ばじ」——見事な手蹟ぢやツたぞ。

と艶書の中の句を唱す、オリヴィアには一向通せず。

オリウ マルツ、オリオ、卿は何を申して居るのぢや？

マルツ 「或る人は富貴の家に生れ」——

オリウ オヤ！

マルツ 「或る人は勳功を以て富貴を獲」——

オリウ アレ！

マルツ 「又或る人は無理に富貴の地位に祀りあげらる」——

オリウ 大變々々、什麼したらよからう！

マルツ 「いづぞや卿に黄色の靴襪を穿けとすゝめ」——

オリウ 黄色の靴襪！

マルツ 「又十文字の襪紐を結ばんことを望める人を想ひ出て玉へ」

オリウ 十文字の襪紐！

マルツ 「卿若し青雲の志あらば萬事その心のまゝなり」

オリウ 妾がアノ立身するので！

マルツ 「若し又そを欲せずとならば永く卿を僕婢の群に入れおかん」

オリウ オヤ、これは正眞の狂人ぢや。

下僕登場

僕 オルシノ公爵家の若衆の方が又御出てになりました何と申上げ



てもお戻りになられませず、是非姫君に御取次ぎをとの儀にふりま  
する。

オリウ　すぐ面會してあげるわいな。

と下僕退場

マリア卿はよくこの男の面倒を見てやりや、従弟のトービは何所に  
行つてぢや？誰かに命じて充分の監視を怠らせまいぞ、何事ありと  
も怪我などさせてはなりませんぬぞ。

とオリウア及びマリア退場

マルウオーリオ後にて大得意の獨り合點、

マルウ　ホイー！いよ／＼拙者の肚裏が先方に通じたから難有い、拙者の  
監督役にはトービ以下の人間ではモ一役不足ぢや、これですツかり

艶書の文句に當て候つて來る。姫はこの拙者に花を持たせ、意張らせ  
る爲めに、わざとトービを寄越すのぢや、艶書の中にチャンとさう書い  
てある。縁戚の某に對ひては成るべく反抗ひ玉へ。口には堂々として  
天下國家の經綸を説き、行儀作法は須らく不自然突飛なれ。そして一  
々その行り方まで指圖がしてある。例へば氣六ヶ敷しい顔とか勿体  
振つた態度とかゆつたりとした物の言振りとか、萬事皆貴公子らし  
く構へて居れとの御注文ぢや。モ一いよ／＼姫はすツかり此方のも  
のぢやが、これと申すも皆神の御仕業、あゝ罰當りの人間とはなりた  
う無いものぢや。只今なども行きがけに、よくこの男の面倒を見てや  
りや」と言はれたへ、男は實に難有い！マルウオーリオと名を呼ばす、  
又家令としても取扱はず、そしてたゞ男——イヤ何から何まで一々



辻褓が合つて居る。モ一罌粟粒ほどの、又その半分ほどの、心配も苦勞も邪魔も不安心の種も密柑の種も——文句が品切れになつた。兎に角わが大望の邪魔を擴げるものは天下の何所を搜したとて一ツもありはせぬ。これと申すも皆神様の御仕業、難有うムります。

腰元 マリア、トービ及びフアビアンと連れ立ちて再登場

トービ 外にて、

トービ 一体全体何所に居やがるのぢや？地獄の鬼の千疋や二千疋彼奴の身体に憑託ッて居たとて黙つて引込むやうな乃公ではないぞ。フアビ 爰に居た爰に居た——モシ、コレ全体什麼したのぢや？什麼したのぢやよ、全体——。

マルウ ヲーリオ傲然と構へ、

マルウ コラ／＼退り居らう。眼通り致すこと相成らぬ。余の閑居の邪魔に相成るぞ、退り居らう。

マリア ソレ御覽なされませ、あの通り悪魔に憑託かれて居ます、妾が申した通りでムりませう。モシトービ様、監視役は貴下でムりますぞ。マルウ エへ、姫の御見立ちやナ。

と大得意、

トービ これ！これ！静かに——  
とわざとらしくマリアを制し、

この男は除程御手柔かに取扱はねばならぬ。萬事は俺に任せておけ。時にマルウ、オーリオ、近頃別に變つたこともないか。何の阿呆らしい、悪魔などは相手にせぬことぢやよ。彼麼ナものは人間の仇敵ぢやよ。